福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1441 集

田村２０

―第２８次調査報告―

２０２２

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1441集

田村２０

―第２８次調査報告―

遺跡略号　ＴＭＲ－２８
調査番号　１８２０

２０２２
福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は宅地造成事業に伴う田村遺跡第２８次調査について報告するものです。この調査では、縄文時代晩期から弥生時代にかけての集落遺跡を検出し、貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、土地所有者様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和４年３月２４日

福岡市教育委員会
教育長　星子　明夫

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が宅地造成事業に伴い、福岡市早良区田村２丁目706番1、708番7地内で平成30年11月12日から平成31(令和元)年3月15日にかけて発掘調査を実施した、田村遺跡第28次調査の報告書である。
2．発掘調査および整理報告書作成は、民間受託事業として実施した。
3．遺構の実測と写真撮影は上角智希、名取さつきが行った。
4．遺物の実測と写真撮影は上角、中原三栄子が行った。
5．製図は上角、長野千重、貝原知子が行った。
6．本書で用いる方位は磁北である。
7．本書に掲載した座標は世界測地系を用いた。
8．座標・標高は、都市再生街区基本調査成果の多角点10D33（H=15.16m)、10D33から引照した。
9．本書に使用した遺構略号は以下の通りである。
SC　竪穴住居、SK　土坑、ST　甕棺、SX　その他、SP　ピット、NR　自然流路
10. 本書に関わる記録・遺物等は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
11. 本書の執筆・編集は上角が行った。
12. 刻目突帯文土器の記述に関して以下の書籍を参考にした。
山崎純男1980「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『鏡山猛先生古稀記念　古文化論攷』

遺跡名	田村遺跡	調査次数	２８次	調査略号	TMR-28
調査番号	１８２０	分布地図図幅名	84 重留	遺跡登録番号	401370317
申請地面積	3,784㎡	調査対象面積	814.96㎡	調査面積	843㎡
調査期間	平成30（2018）年11月12日～ 平成31（2019）年3月15日			事前調査番号	30-2-272
調査地	福岡市早良区田村２丁目706番1、708番7				

本文目次

第１章　はじめに…… 1
　1. 調査に至る経緯 …… 1
　2. 調査の組織 …… 1
第２章　遺跡の立地と環境…… 2
第３章　調査の記録…… 6
　1. 調査の概要 …… 6
　2. 竪穴住居跡 …… 10
　3. 土坑 …… 14
　4. 甕棺墓 …… 22
　5. 河川跡 …… 22
第４章　まとめ…… 41

挿図目次

第１図　田村遺跡の位置（1/5,000）…… 3
第２図　第 28 次調査区の位置（1/1,000） …… 4
第３図　調査区平板測量図（1/400）…… 5
第４図　A 区遺構配置図（1/160）…… 7
第５図　B 区遺構配置図（1/160）…… 8
第６図　B 区北壁土層図（1/100）…… 9
第７図　SC07・08（1/60）および出土遺物（1/3） …… 10
第８図　SC20・21・25・26・27・30・44（1/60）…… 12
第９図　SC20・21・26・27・30・44 出土遺物（1/3、1/4）…… 13
第10図　SC25 出土遺物（1/3） …… 14
第11図　SK10・12・13・19・32・41（1/40）および出土遺物（1/3） …… 16
第12図　SK06・28・34・52・53（1/60）および出土遺物（1/3） …… 17
第13図　SK09・16・24・49・54（1/60）および出土遺物（1/3、1/4）…… 18
第14図　SK22・37・51（1/40）および出土遺物（1/4、1/1）…… 19
第15図　SK11・39・40（1/40）および出土遺物（1/4） …… 20
第16図　SK35・38・48（1/40）および出土遺物（1/3） …… 21
第17図　ST29（1/40）および出土遺物（1/4） …… 22
第18図　河川跡平面図および断面模式図（1/80） …… 27
第19図　河川跡南壁土層図（1/50） …… 28
第20図　NR01 出土遺物１（1/3）…… 29

第21図　NR01 出土遺物２（1/3）…… 30
第22図　NR02、NR03 より東の砂層出土遺物（1/3）…… 31
第23図　NR03 出土遺物１（1/3）…… 32
第24図　NR03 出土遺物２（1/3）…… 33
第25図　NR04 出土遺物１（1/3）…… 34
第26図　NR04 出土遺物２（1/3）…… 35
第27図　NR04 出土遺物３（1/3）…… 36
第28図　NR04 出土遺物４（1/3、1/1）…… 37
第29図　B 区出土遺物１（1/3）…… 38
第30図　B 区出土遺物２（1/3）…… 39
第31図　B 区出土遺物３（1/3）…… 40

写真目次

写真１　NR04 上層土器出土状況（南から）…… 26
写真２　NR03 底（南東から）…… 26

図版目次

１－１　調査区から南東方向をのぞむ…… 42
１－２　A区全景（西北西から）…… 42
２－１　B区全景（西から）…… 43
２－２　C区全景（南から）…… 43
３－１　A区河川跡（西から）…… 44
３－２　NR01完掘状況（北から）…… 44
３－３　河川跡トレンチ掘り下げ作業（東から）…… 44
４－１　NR03・04底（北西から）…… 45
４－２　NR04完掘状況（北から）…… 45
４－３　B区礫群１作業風景（東から）…… 45
４－４　B区礫群１～礫群２（西から）…… 45
５－１　SC07（南西から）…… 46
５－２　SC25（北東から）…… 46
５－３　SC27（北東から）…… 46
５－４　SC30（西から）…… 46
５－５　SK12（東から）…… 46
５－６　SK13（南から）…… 46
５－７　SK28（西から）…… 46
５－８　ST29（北から）…… 46

第１章　はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、福岡市早良区田村２丁目706番1、708番7における宅地造成事業に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成30年6月26日付で受理した（事前審査番号30-2-272）。

申請地に関しては、平成29年に別件で埋蔵文化財の有無についての照会を受け、平成29年11月8日に試掘調査を行っていた。試掘の結果、申請地内の西半ではGL － 45㎝で弥生時代の遺構が多数確認され、東半には自然流路が走り、そこに弥生時代の遺物包含層が形成されていることが明らかになっていた。

埋蔵文化財課事前審査係は、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。現在の水田に盛土をして宅地を造成するものだが、道路となる範囲については下水管等を埋置するため埋蔵文化財への影響が免れない。よって、この範囲に限って今回の申請に基づく記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。その後、平成30年9月3日付で個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年11月5日から発掘調査を、翌令和元年（平成31年）度～令和3年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

なお、宅地造成後に土地を区画して分譲、戸建住宅が建てられたが、いずれも基礎工事が遺構面に影響を与えないと判断し、発掘調査は不要とした。

２．調査の組織

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会
（発掘調査：平成30年度・資料整理：令和元～３年度）

調査総括：	文化財活用部埋蔵文化財課長	大庭　康時（30年度）
		菅波　正人（元～３年度）
	同課調査第１係長	吉武　学　（30・元・２年度）
		本田浩二郎（３年度）
庶　　務：	文化財活用課管理調整係	松原加奈枝（30・元・２年度）
		井手　瑞江、内藤　愛（３年度）
事前審査：	埋蔵文化財課事前審査係長	本田浩二郎（30・元・２年度）
		田上勇一郎（３年度）
	同課事前審査係主任文化財主事	田上勇一郎（30・元・２年度）
		森本　幹彦（３年度）
	同課事前審査係文化財主事	朝岡　俊也（30・元年度）
		三浦　悠葵（２・３年度）
調査担当：	埋蔵文化財課調査第１係主任文化財主事	上角　智希（30・元年度）
	埋蔵文化財センター　保存分析係長	上角　智希（２・３年度）

第２章　遺跡の立地と環境

田村遺跡は、室見川が貫流する早良平野の東部中央の沖積微高地に立地する。東西約 760 m、南北約 850m の範囲に展開し、標高は 15 ～ 17 mを測る。本遺跡周辺の室見川東岸の沖積地には、北から順に原遺跡、次郎丸遺跡、免遺跡、田村遺跡、野芥遺跡、四箇遺跡、重留遺跡などが立地している。

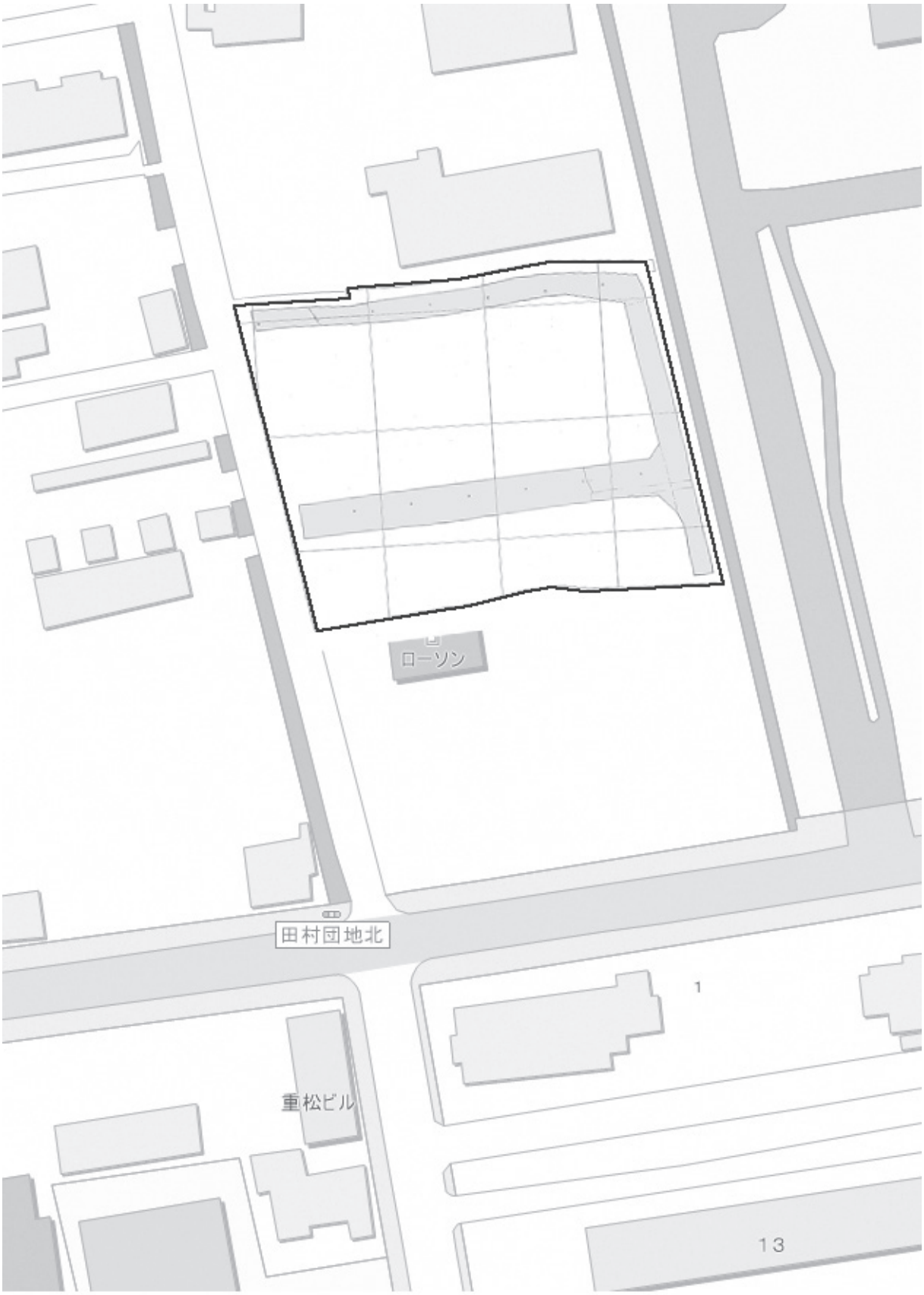
遺跡周辺は室見川を中心とする河川の沖積作用によって形成された低平な地形であり、1975 年以降の宅地開発・学校建設等が始まるまでは集落が点在する以外は一面が水田であった。

田村遺跡では 28 次にわたる調査が実施され、縄文時代早期から江戸時代に至る複合遺跡であることが確認されている。中心となるのは縄文時代後晩期・弥生時代・平安時代後期から室町時代初頭の 3 時期である。縄文時代後晩期は埋甕・溝などがみとめられ、遺物は遺跡の全域で出土する。集落は明らかでない。弥生時代は前期の甕棺墓群・竪穴などが検出され、中期後半には河川内に井堰・杭列などの水利施設が構築され、微高地上には集落が形成される。河川は奈良時代までに埋没し、平安後期から室町初期にかけ、多数の掘立柱建物群が検出され、200 棟を越える建物群の有り様と多量の輸入陶磁器の検出から、該期の早良平野内での拠点集落と目され、中世集落研究において重要な遺跡となっている。

今回の第 28 次調査では、上記 3 時期のうち弥生時代の集落と河川跡（自然流路）だけが検出された。この弥生時代の河川跡は前述のように奈良時代までに完全に埋没したようである。昭和 40 代作成の周辺地図には一帯に正方形に区画された水田が広がっており、河川跡がどこに埋没しているのかまったく見当がつかないが、既往の調査で河川跡が見つかっている。本調査区の真南に位置する第 3 次調査区、その西隣の第 5 次、6 次調査区において時計の 7 時方向から 1 時方向へと流れる河川で、おそらくこの流れが本調査区へと続いているのだろう。河川跡の支流が田村遺跡北東部の第 20 次調査区でも確認されている。

第１図　田村遺跡の位置（1/5,000）

調査区をまたがる曲線は
弥生時代の河川跡を示す



第 2 図　第 28 次調査区の位置（1/1,000）

第 3 図　調査区平板測量図（1/400）

第３章　調査の記録

１．調査の概要

【調査区の設定】

本調査は、現在の水田に盛土をして宅地造成し、17 軒分の戸建住宅地に区画して分譲する事業に先立つものである。下水管等を埋設する道路部分のみを調査対象とするため、F の字をひっくり返した形のトレンチ状の調査範囲となった（**第３図**）。A 区、B 区、C 区に分け順次調査を行なった。

【層　序】

B 区北壁の土層図を第 6 図に示す。ここはちょうど水田の畔道になっており、現地表から畔が 20 ～ 30㎝、その下に水田耕作土が 50㎝程度、その下に黄橙色～褐色の床土が 20㎝堆積しており、床土を剥ぐと暗褐色シルト質土になり、これが遺構検出面になる。A 区でも同様の層序である。調査地西側の道路面が標高約 15.2 m、その脇に位置する A-1 区の遺構検出面が標高 14.1 m、そこから東に向かって緩やかに低くなっていき西端の A-7 区遺構検出面の標高が 13.8m である。

【概　要】

調査地の中央から西側にかけて、つまり A 区と B 区西端の B-1 区において、縄文時代晩期終末～弥生時代中期にかけての遺構を密に検出した。田村遺跡の他の調査地点では平安時代後期から室町時代初頭の集落跡もよく検出されているが、本調査地では古代の遺構はまったく検出されなかった。一方、調査地の北東側の広い範囲が弥生時代の河川跡の範囲内であった。A 区と B・C 区では対照的な様相を示す（第 3 図）。

【A　区】

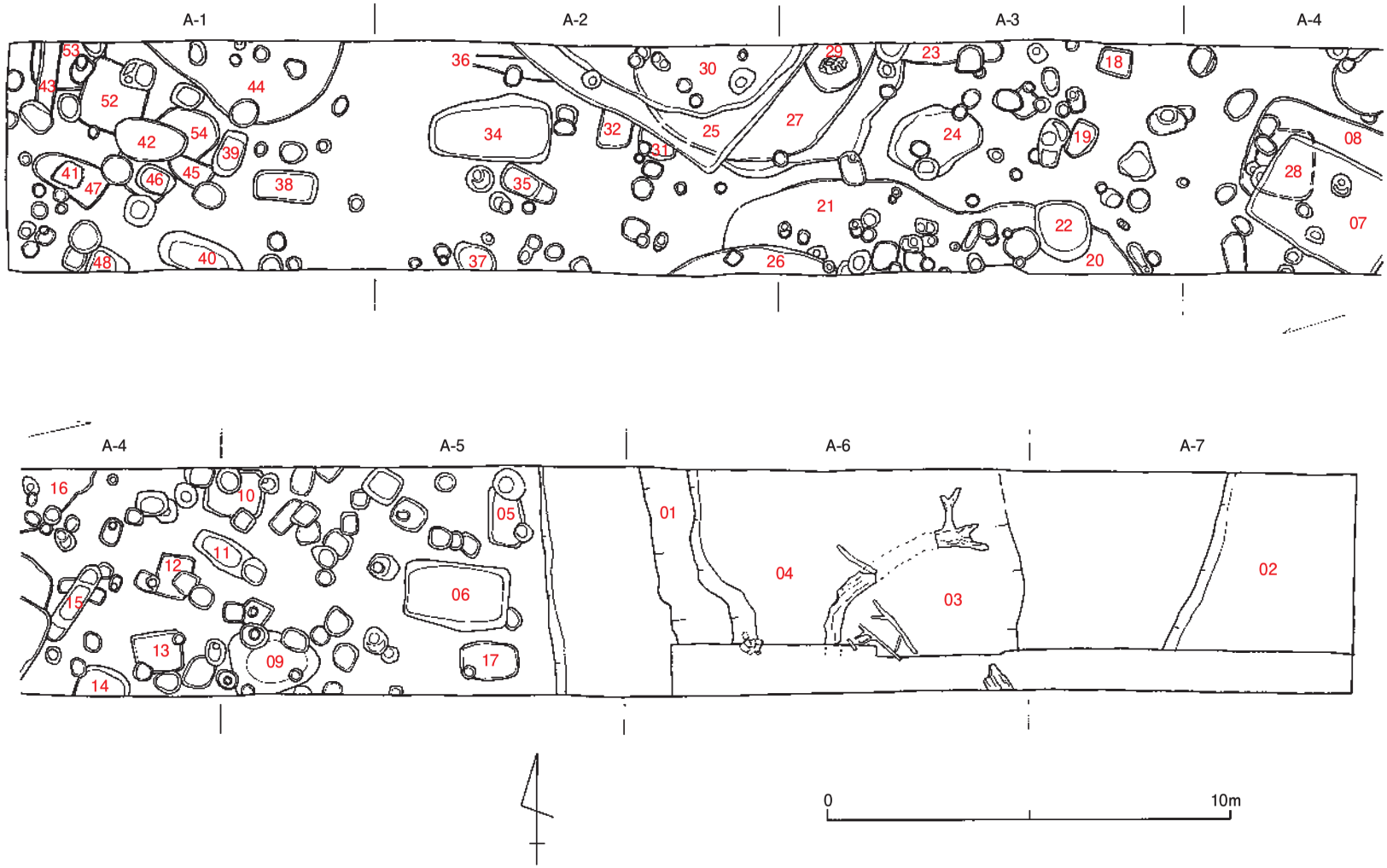
A 区は幅 6m、長さ 68m の細長い長方形の調査区で敷地の中央南寄りを東西に横断する。西側 50m ほどの範囲には縄文時代晩期終末～弥生時代中期にかけての遺構が密に分布する（**第４図**）。竪穴住居跡 9 基、土坑 35 基程度、ピット多数などを検出した。東側の A-6・7 区では縄文時代晩期～弥生時代中期頃にかけての遺物を大量に含む河川跡（自然流路）を検出した。最初にトレンチを設定して人力で掘り下げを行い、自然流路内の土層堆積をさらに細かな流れや堆積時期に区分できないか、観察した。土層観察から NR01 ～ NR04 の流れに細分し、遺物を分けながら掘り下げを進めた。流路の底に黒色粘土の遺物包含層があり、途中の砂層内からも大量の土器が出土した。また、木材も出土した。結果的には、NR02 は中世の遺物を含む新しい流れだが、ほかの３つの流れはいずれも縄文晩期から弥生中期にかけての土器を含んでおり、時期的な細分はできなかった。

【B　区】

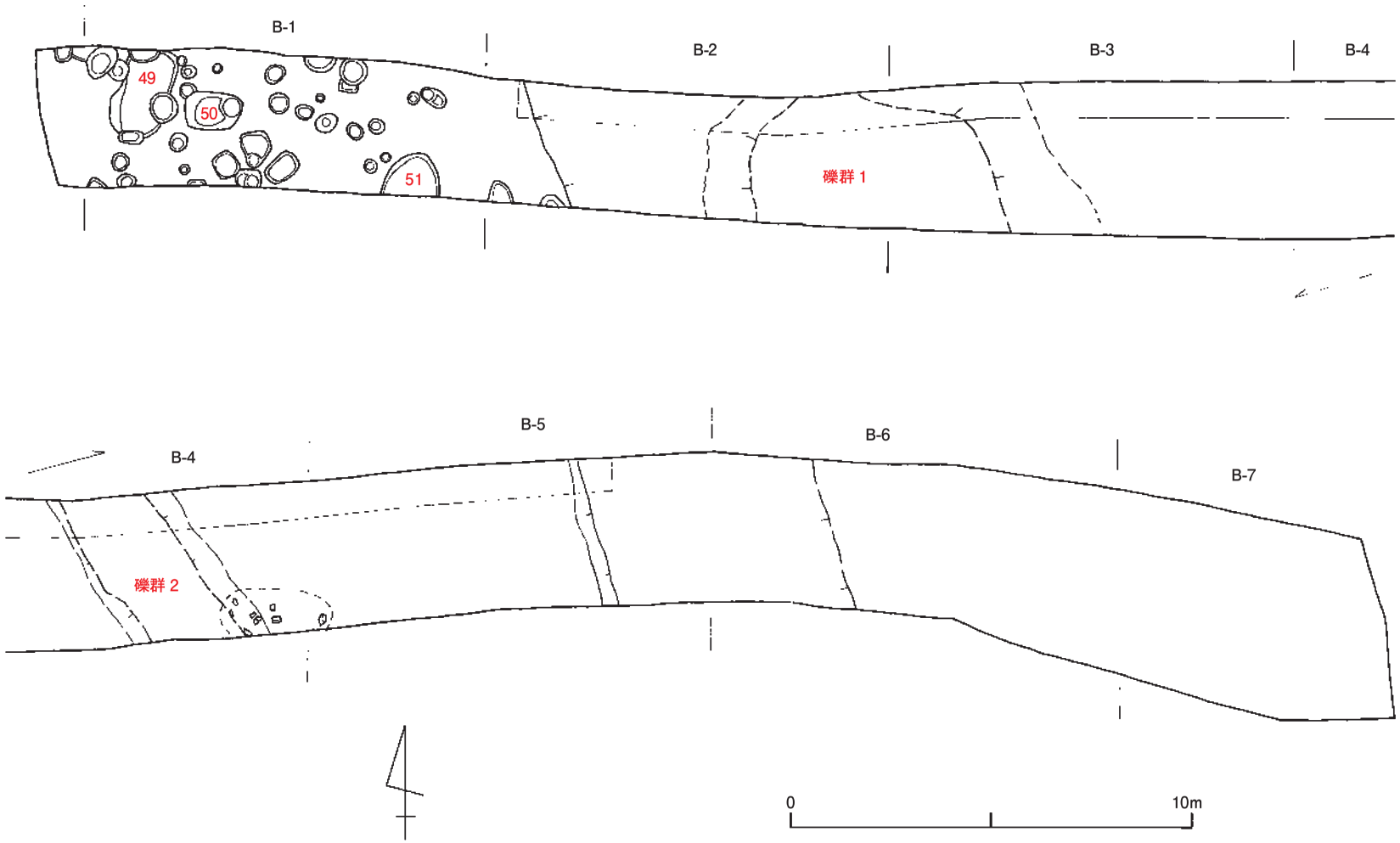
B 区は申請地の北端を東西に横断する幅 4m、長さ 68m のトレンチ状の調査区である。西端 B-1 区の 10m 程度の範囲に限って黄褐色シルト質土の遺構検出面があり、弥生時代前期から中期の土坑、ピットを検出した。それより西側は砂・シルト・礫層が堆積する河川の氾濫跡（自然流路）であった（**第５図**）。はじめは人力で掘り下げを行ったが、調査期間の制約から途中から重機を使って荒く掘削した後、人力で底面を出していった。調査区を横断する土層図を作成した。B 区では黒色粘土の遺物包含層が局部的にしか検出されず、土器があまり出土しなかった。堆積の深さも全体的に浅く A 区とは対照的なあり方を示す。

【C　区】

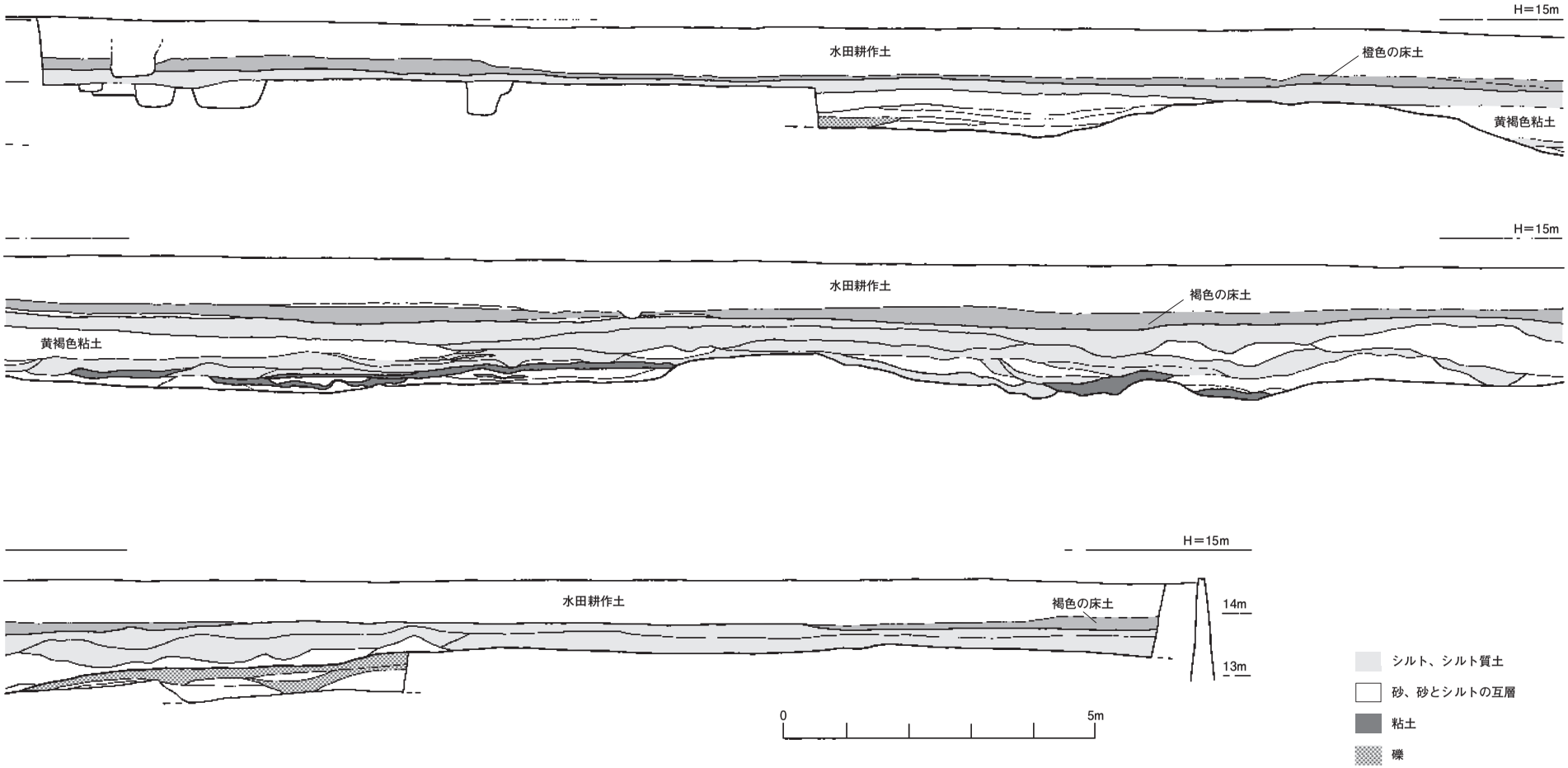
C 区は申請地の東端を縦断する幅 4m、長さ 48m の調査区である。C 区全域が河川跡およびその氾濫跡だと確証を得られたので、重機で 2 日かけて掘り下げて調査を終了した。



第４図　A 区遺構配置図（1/160）



第 5 図　B 区遺構配置図（1/160）



第６図　Ｂ区北壁土層図（1/100）

2．竪穴住居跡

A 区において円形竪穴住居跡 6 軒と方形竪穴住居跡 3 軒を検出した。調査区が細長いため多くは平面プランの一部だけの検出に留まる。

SC07（第 7 図）

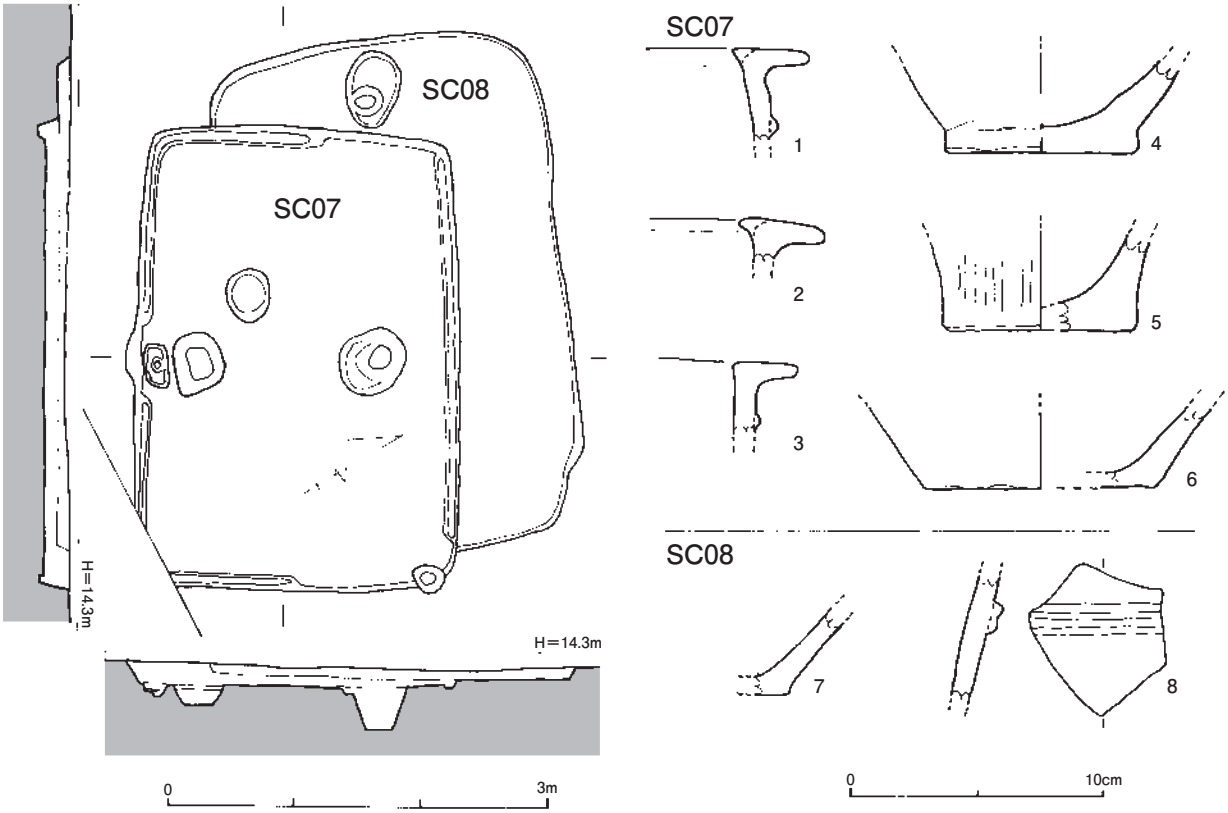
A-4 区で検出した竪穴住居跡である。長辺 3.7m、短辺 2.6 m の方形プランで深さ約 20㎝が残る。壁面に沿って周溝を設けるが一部途切れる。主柱穴は 2 本のようだ。床面は汚れが多く貼床と思われた。汚れ部分を除去すると凹凸のある底面が現れた。弥生時代中期の土器や黒曜石がコンテナ 1.5 箱分出土した。

1 ～ 3 は甕の口縁部である。L 字形口縁で 1・2 は口縁内側に粘土を付け加えて突出させる。1・3 は直下に突帯を巡らす。**4・5** は甕の底部である。**6** は壺の底部である。

SC08（第 7 図）

A-4 区で検出した竪穴住居跡である。長辺 4.1m、短辺 2.7 m程度の方形プランで SC07 に大きく切られている。深さは 10㎝弱が残る。床面は汚れが多く貼床と思われた。汚れ部分を除去すると凹凸のある底面が現れた。弥生土器がコンテナ 0.5 箱分出土した。

7 は壺の底部であろう。**8** は甕の胴部で断面 M 字状の突帯がつく。



第 7 図　SC07・08（1/60）および出土遺物（1/3）

SC20（第８図）

A-3 区で検出した円形の竪穴住居跡である。深さ 20㎝弱だけ残り、調査区外に延びる。SC21 との切り合い関係はわからない。多くのピットと切り合っており、SC20、21 ともに遺構を検出して１段下げた段階で底面に達した。弥生時代前期の土器がコンテナ１箱分出土した。

第９図 **9** は壺である。復元口径 17.8㎝を測り、内外面に横ナデと磨きを施す。**10** は壺の底部で復元底径 7.8㎝。**11** は壺胴部の小片で、外面に無軸羽状文を施す。**12** は鉢で復元口径 16.6㎝。内外面に横ナデと磨きを施す。

SC21（第８図）

A-3 区で検出した円形の竪穴住居跡である。深さ 20㎝弱だけ残り調査区外に延びる。SC26 に切られ、SC20 との切り合い関係はわからない。弥生時代前期の土器などがコンテナ１箱分出土した。

第９図 **13** は壺の口縁部で復元口径 17.6㎝を測る。**14** は壺の底部で復元底径 8.6㎝。**15** は甕の口縁部で緩やかに外反し浅い刻目を施す。内面に横ハケ。**16** は石包丁である。頁岩か。

SC25（第８図）

A-2 区で検出した方形の竪穴住居跡である。方形住居跡１棟と円形住居跡２棟が重なっているが、この方形住居跡 SC25 が最も新しい。長辺 5.9 ｍ、短辺 4.2 ｍを調査区内で確認でき、調査区外に延びている。コーナーにだけ周溝がある。弥生時代中期の土器が主であるが前期の土器も混じる。丹塗りの土器片がかなり含まれる。コンテナ５箱分が出土した。

第 10 図 **39** ～ **43** は甕の口縁部である。いずれも鋤先口縁であるが、内面側への突出の具合や口縁の垂下の角度にバリエーションがある。口径は 39 が 23.8㎝、40 が 24.6㎝。**44** は高坏である。復元口径 25.2㎝を測り、坏部中位に１条の突帯を巡らす。内面は丹塗り。**45** は大型壺の口縁部である。外面に丹塗り。**46** ～ **48** は壺の胴部であろう。46・47 は外面に無軸羽状文を線刻する。48 は断面 M 字形の突帯がつき外面は丹塗り。**49** は鉢か。褐灰色を呈する。**50** は小型甕の底部である。

SC26（第８図）

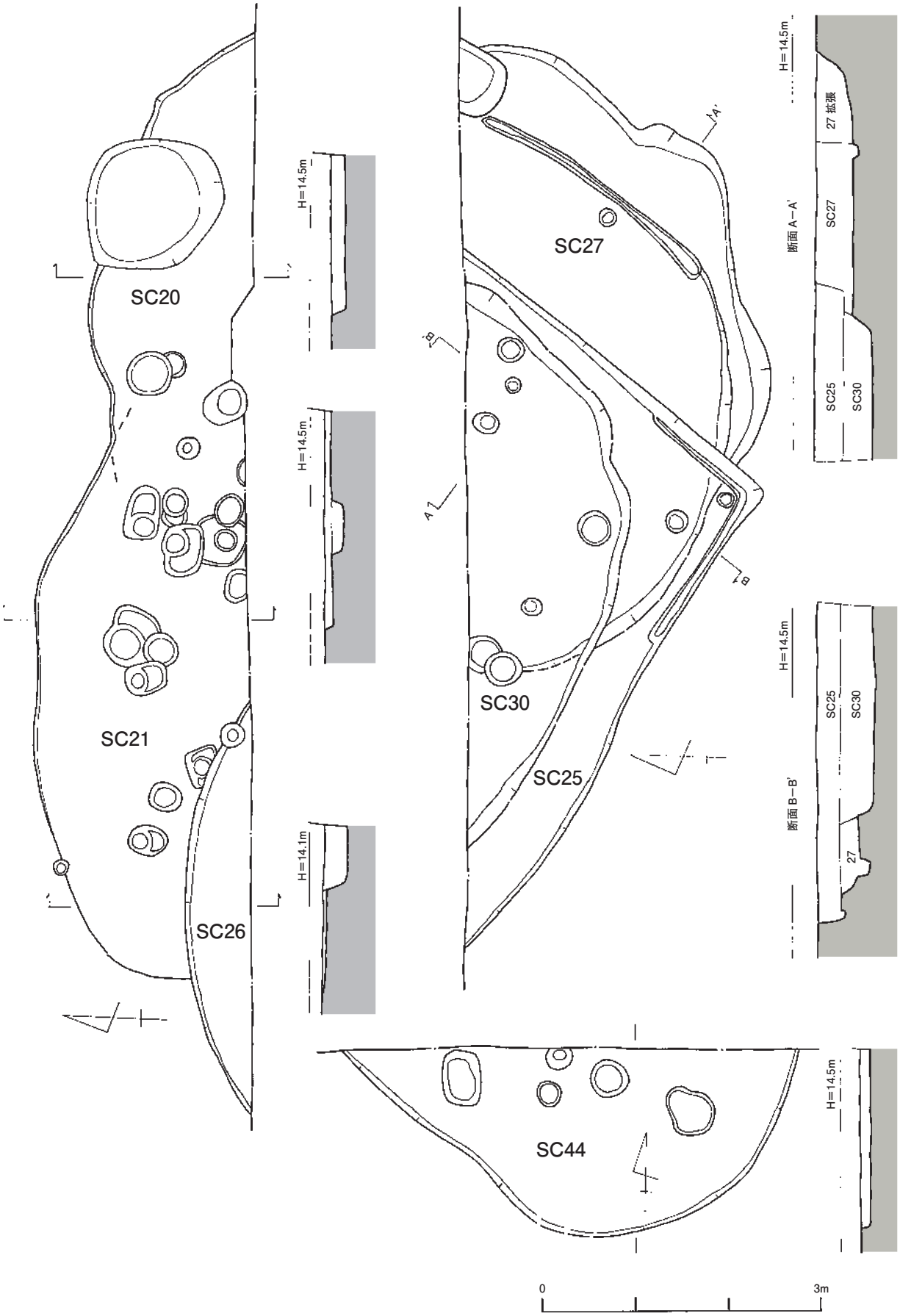
A-2・3 区で検出した円形の竪穴住居跡である。深さ 30㎝程度が残り、遺構の大部分は調査区外にある。SC21 を切る。刻目突帯文土器や黒曜石がコンテナ 0.5 箱分出土した。

第９図 **17** ～ **19** は甕の口縁部で刻目突帯を施す。**20** は甕の底部で底径 7.0㎝を測る。

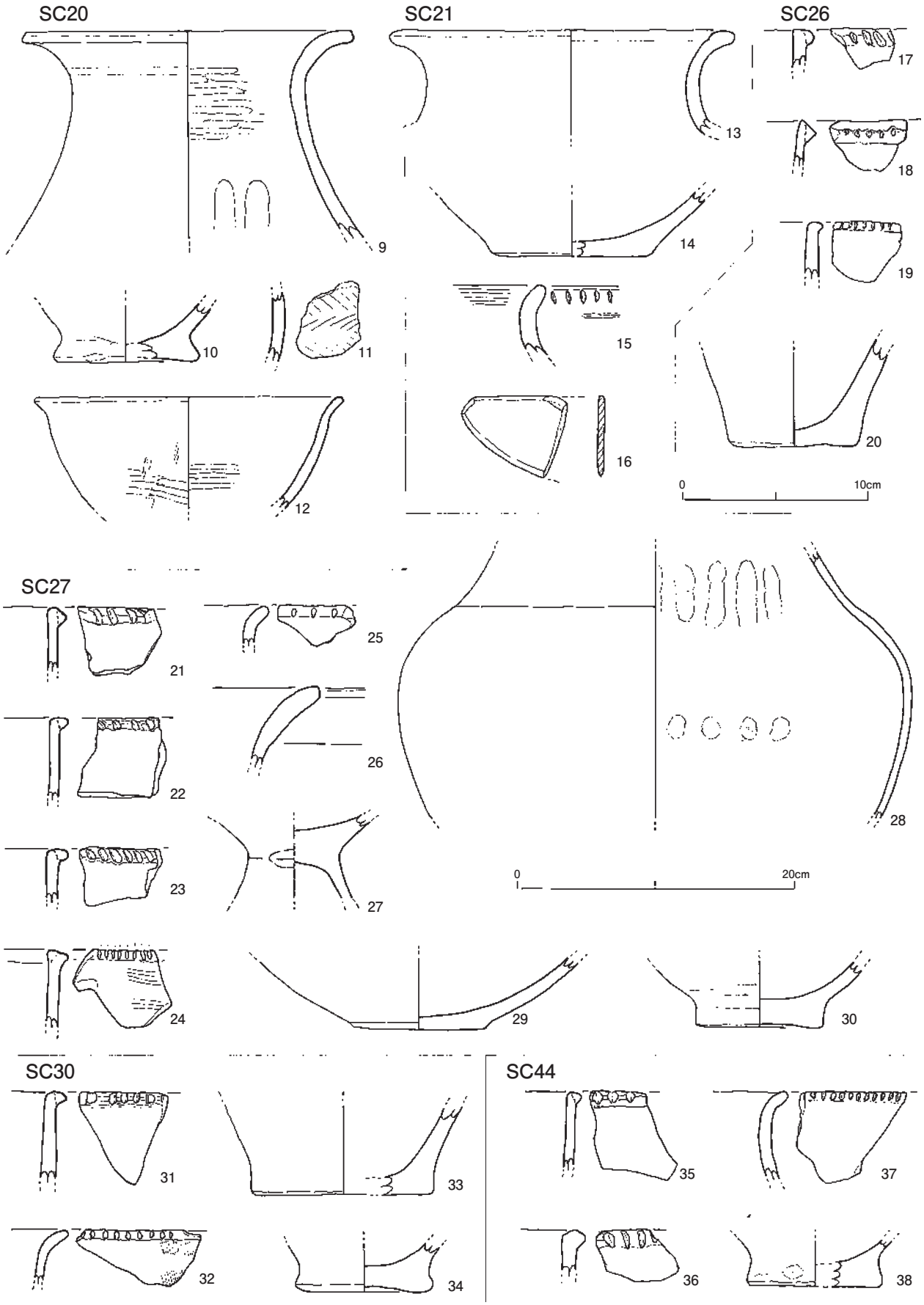
SC27（第８図）

A-2･3 区で検出した円形の竪穴住居跡である。方形住居跡１棟と円形住居跡２棟が重なっているが、この円形住居跡 SC27 が最も古い。遺構の半分程度の面積を検出し、残りは調査区外に延びる。外周沿いに小さめの柱穴があるようだ。また、外周沿いではなく壁から 60㎝ほど内側で弧状の周溝が検出されたので、住居が途中で拡張されたものと推測する。縄文時代晩期終末から弥生前期の土器が主で、弥生時代中期の土器が少量混じる。コンテナ 1.5 箱分が出土した。

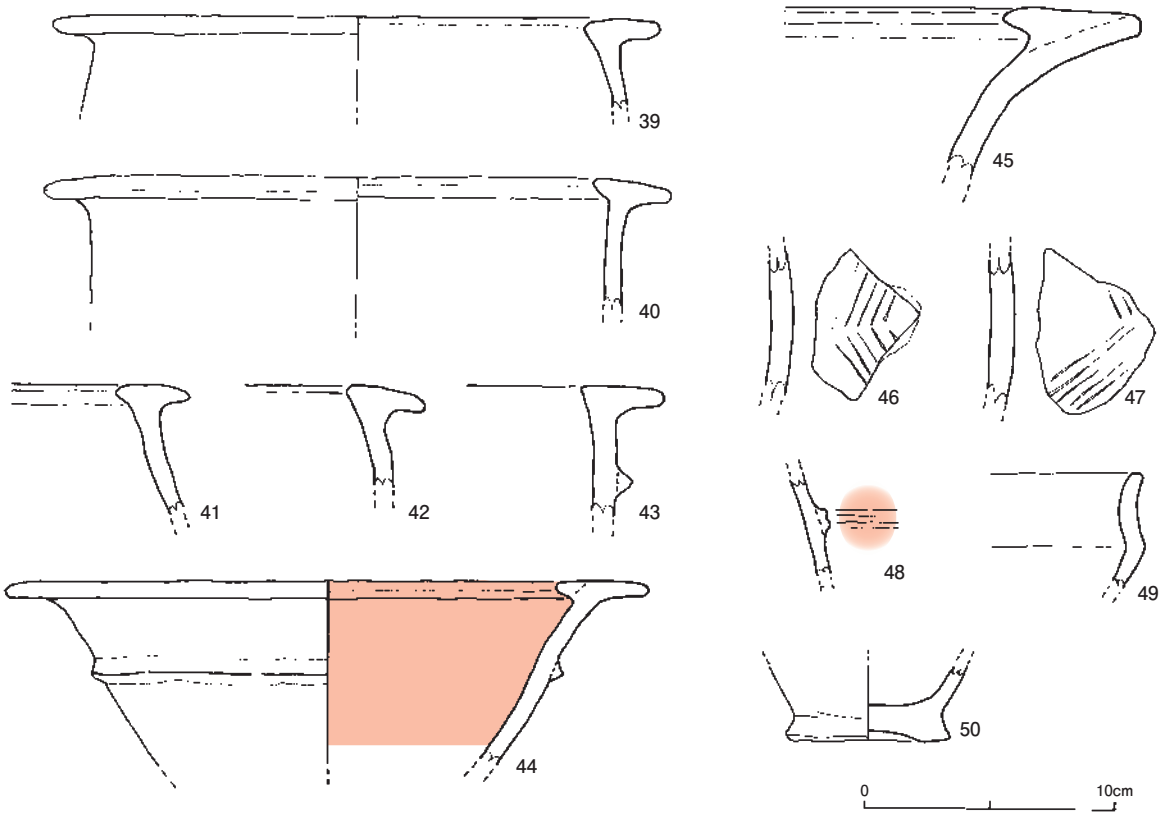
第９図 **21**～**25** は甕の口縁部で刻目を施す。口縁端部に突帯を付け加えるものと口縁端部を外反させてそこに刻目を施すものがある。**26** は壺の口縁部である。**27** は高坏である。**28** は大型壺で胴部最大径 36.8㎝を測る。胴部と頸部と境に明瞭な稜があり、その内面には指押さえの痕跡が残る。**29**・**30** は壺の底部である。



第 8 図　SC20・21・25・26・27・30・44（1/60）



第 9 図　SC20・21・26・27・30・44 出土遺物（1/3、1/4）　　28 のみ 1/4、他は 1/3



第 10 図　SC25 出土遺物（1/3）

SC30（第 8 図）

A-2 区で検出した円形の竪穴住居跡である。方形竪穴住居跡 SC25 完掘後にその底面にて検出した。遺構面からの深さ 60㎝が残る。弥生時代前期の土器がコンテナ 1 箱分出土した。

第 9 図 31 は甕の口縁部で刻目突帯を貼り付ける。32 は甕の口縁部で口唇部に直接刻目を施す。33・34 は壺の底部である。

SC44（第 8 図）

A-1 区で検出した円形の竪穴住居跡である。深さ 10㎝だけ残り調査区外に延びる。弥生時代前期の土器がコンテナ 0.5 箱分出土した。

第 9 図 35 ～ 37 は甕の口縁部である。35 は直立した口縁部の外側端部に刻目突帯を貼り付ける。36 は口縁端部を外側に折り曲げ刻目を施す。37 は如意形口縁に直接刻目を施す。38 は壺の底部で復元底径 7.2㎝を測る。

3．土　坑

多くの土坑を検出したが、その大きさや形状によって数種類に分類できそうである。またその類型に時期差が認められそうでもある。よって、類型ごとに分けて報告する。

【小型で平面が四角形、壁が垂直に立つ土坑】（第 11 図）

平面プランが四角形で、壁はほぼ垂直かつ平坦に作られている。長辺でも 1.5 m以下の小型の土坑である。漫然と掘るのではなく、きれいな四角形に仕上げることを意識して掘られていると感じる。時期がわかる遺構はいずれも弥生時代中期にあたる。

SK10　A-4・5 区で検出した。平面プランは 1.5 × 1.2 m、深さ 40㎝を測る。同じタイプの SK12・13 とは近接する。遺物は少量だけ出土。L 字形口縁の破片があり、明るい色調の土器が多いことから弥生時代中期と考えるが、刻目突帯の破片が 1 点混じる。**51** は甕の口縁部で L 字形を呈する。

SK12　A-4 区で検出した。平面プランは 1.1 × 0.9 m、深さ 40㎝を測る。弥生土器がごく少量だけ出土した。小片のため詳細な時期はわからない。

SK13　A-4 区で検出した。平面プランは 1.3 × 1.0 m、深さ 70㎝を測る。弥生土器がごく少量だけ出土した。土器の色調が明るく丹塗り土器が 1 破片あるので、弥生時代中期か。

SK32　A-2 区で検出した。平面プランは 1.0 + α × 0.8 m、深さ 25㎝を測る。北側を SC25（弥生時代中期）によって切られる。弥生土器がごく少量だけ出土。小片のため詳細な時期はわからない。

SK41　A-1 区で検出した。平面プランは 0.7 × 0.6 m、深さ 50㎝を測る。この土坑の壁面は少しオーバーハングしている。貯蔵穴ではなさそうである。弥生土器がコンテナ 1/4 箱分出土した。弥生時代中期。**57** は壺の口縁部である。**58** は甕の口縁部。**59** は甕の底部である。

SK19　A-3区で検出した。平面プランは0.9×0.6m、深さ25㎝を測る。ひと隅だけ直角になっていない。弥生土器がコンテナ0.5箱分出土した。**52・53**は甕の口縁部である。口縁端部が短く外に折れる。内側に粘土を貼り付け肥厚させる。**54**は壺の底部である。**55・56**は甕の底部である。

【大型で平面が四角形の土坑】（第 12 図）

平面プランが四角形で、長辺が 1.5 m以上の大きめの土坑である。壁はほぼ垂直かつ平坦に作られていそうだが、浅いものが多いため確実には言えない。漫然と掘るのではなく、きれいな四角形に仕上げることを意識して掘られていると感じる。時期がわかる遺構はいずれも弥生時代前期にあたる。なお、前述の小型土坑は縮尺 1/40、ここの土坑は縮尺 1/60 で掲載している。

SK28　A-4 区で検出した。平面プランは 1.8 × 1.5 m、遺構検出面からの深さ 35㎝を測る。SC07 の直下で検出した。整理作業中に誤って他の遺構の遺物と混じってしまったため、時期不明である。

SK52　A-1 区で検出した。平面プランは 1.7 × 1.6 m、深さ 25㎝を測る。遺物は少量だけ出土した。**63** は刻目突帯を貼り付けた甕である。**64** は甕の口縁部に直接刻目を施す。

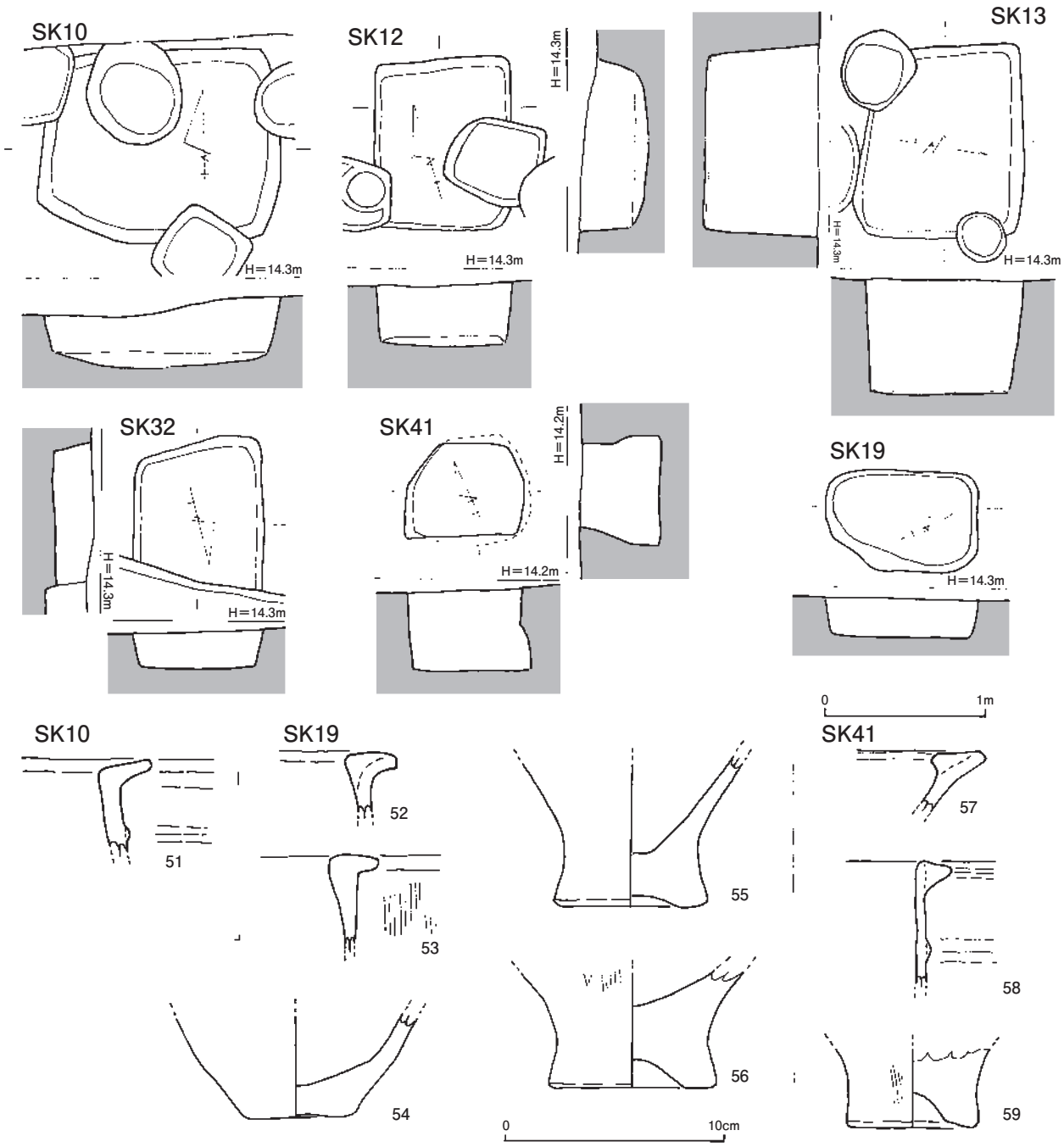
SK53　A-1 区で検出した。平面プランは 1.8 × 1.2 + α m、深さ 15㎝を測る。SK52 に切られる。遺物は少量だけ出土。弥生時代前期。**65・66** は甕の口縁部で刻目を施す。

SK06　A-5 区で検出した。平面プランは 2.6 × 1.7 m、深さ 30㎝を測る。遺物はコンテナ 0.5 箱分が出土した。弥生時代前期。**60** は刻目突帯を貼り付けた甕。**61** は如意形口縁に直接刻目を施した甕。**62** は壺の肩部の破片である。3 条の横線と 3 本の弧状文を線刻する。

SK34　A-2 区で検出した。平面プランは 3.0 × 1.6 m、深さ 50㎝を測る。平面プランはいびつな長方形。遺物はコンテナ 1/4 箱分が出土した。刻目突帯文土器の口縁部片がある。

【大型で平面が不整形の土坑】（第 13 図）

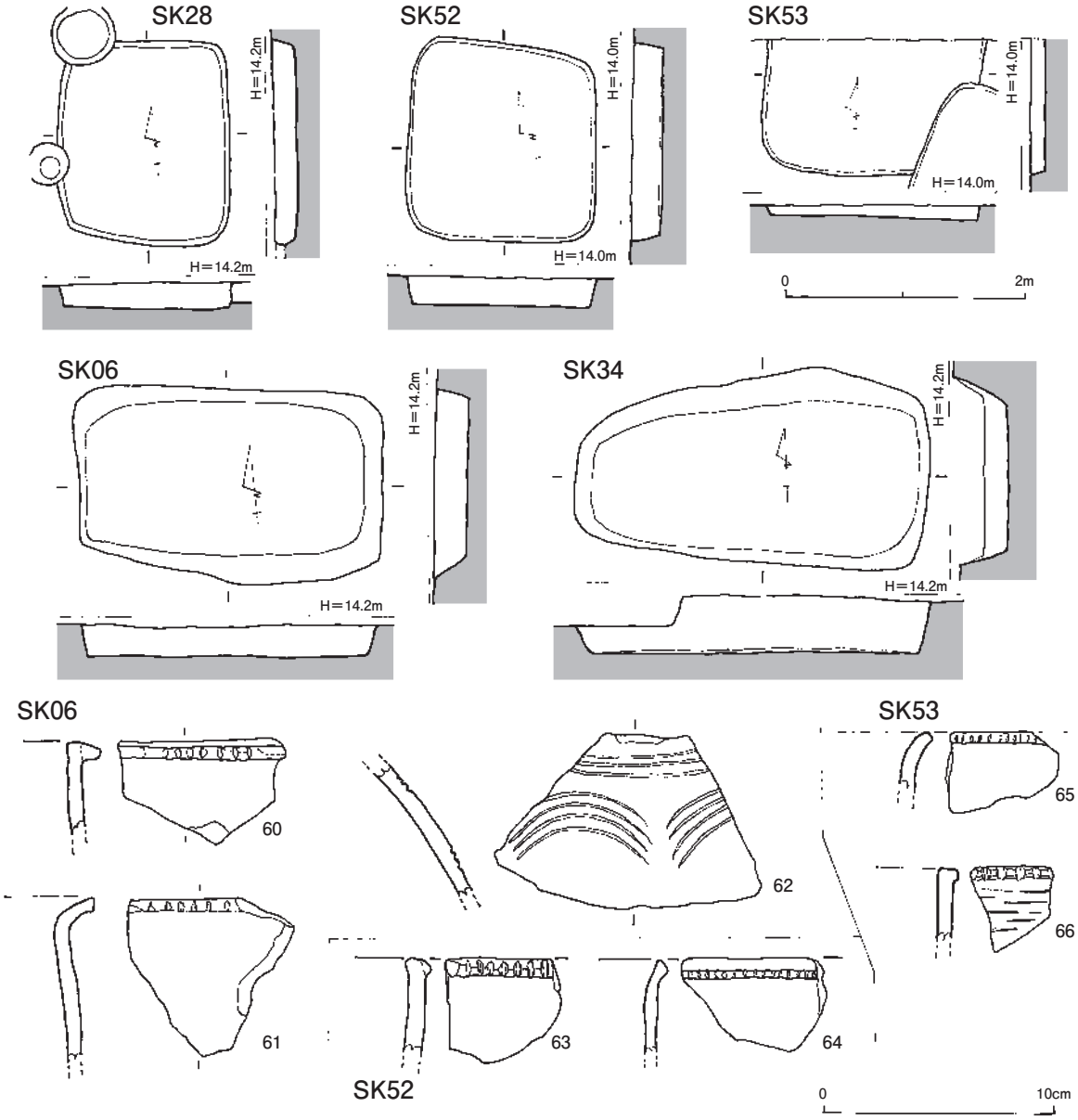
平面プランは不整形で壁面の傾斜も様々である。土坑の形態に規格性が認められない。穴さえ掘れば形はどうでもよいという掘り方である。縮尺 1/60 で掲載している。



第 11 図　SK10・12・13・19・32・41（1/40）および出土遺物（1/3）

SK09　A-5 区で検出した。平面プランは長軸 2.2 m、短軸 1.7 mの略三角形で深さ 25cmを測る。遺物はごく少量だけ出土した。刻目突帯文土器の口縁部がある。

SK16　A-4 区で検出した。調査区内では長さ 3.2 mを測り、さらに調査区外へと延びる。深さは 25cm。遺物はコンテナ 0.5 箱分が出土した。弥生時代中期。**67** は壺の底部片である。**68** は甕の L 字形口縁。**69** は土製の紡錘車で直径 5.4cmを測る。

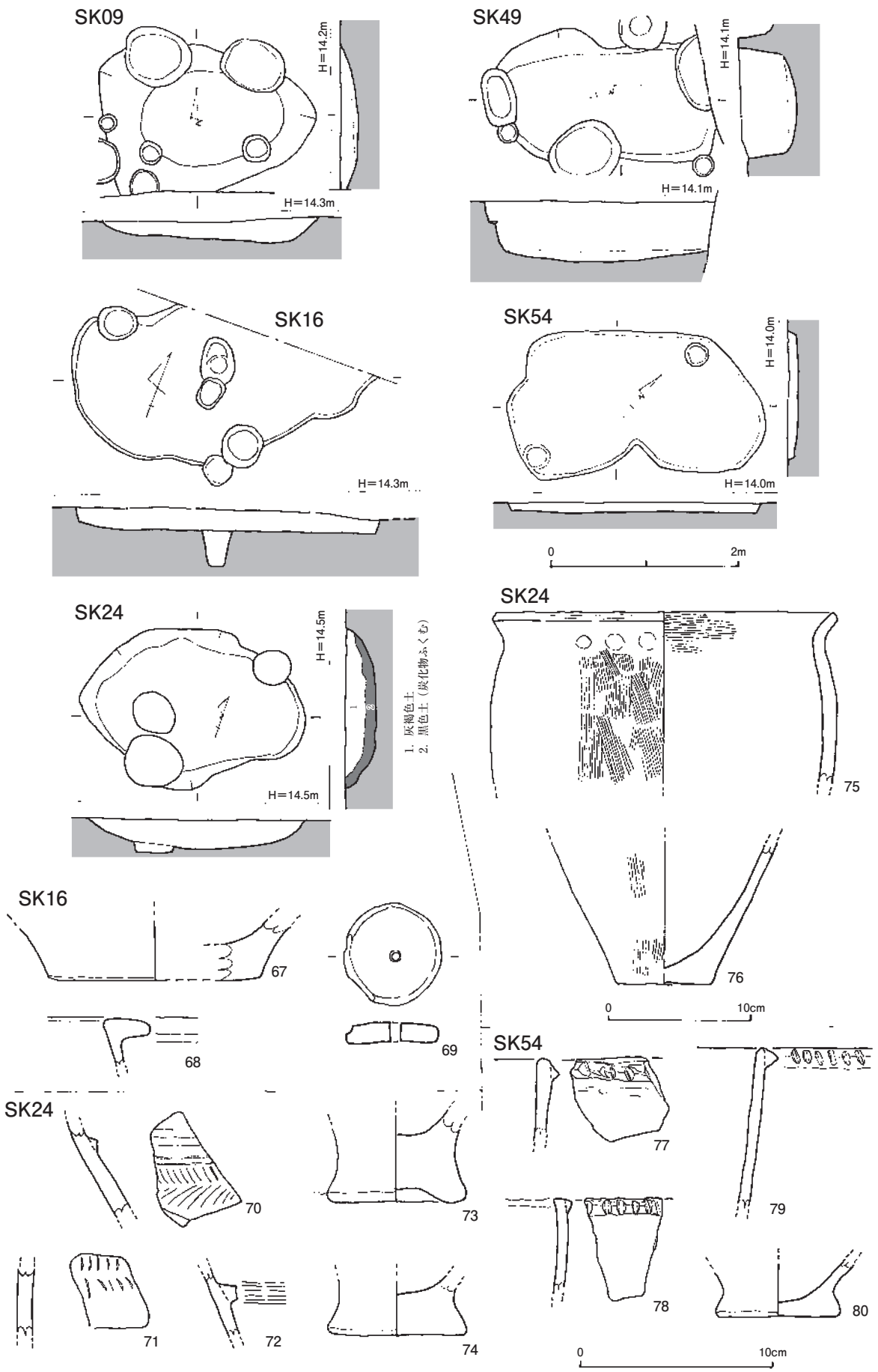


第 12 図　SK06・28・34・52・53（1/60）および出土遺物（1/3）

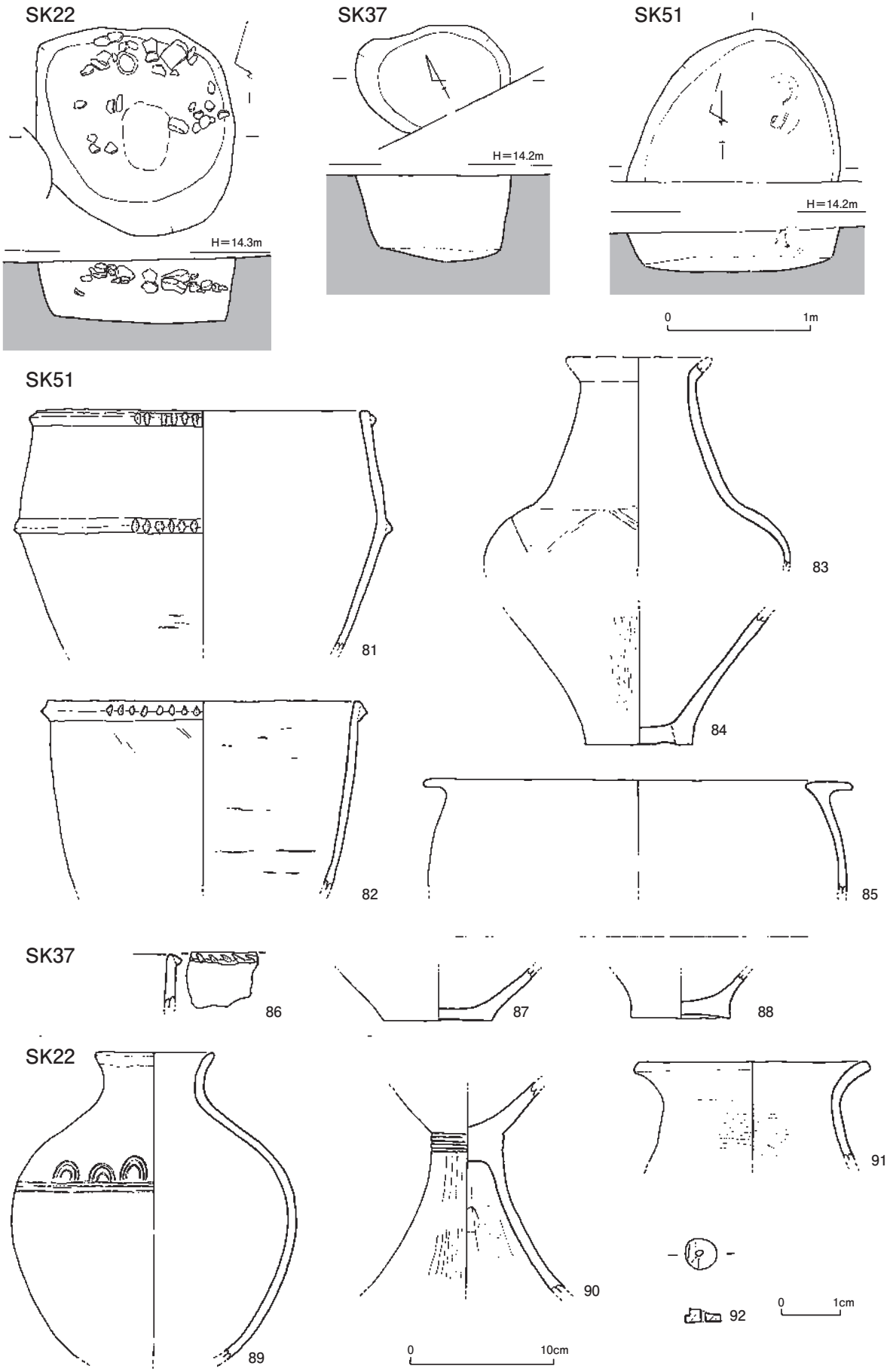
SK24　A-3 区で検出した。平面プランは長軸 2.4 m、短軸 1.7 mの不整形で深さ 35㎝を測る。底面上に厚さ 10㎝程度の炭化物を多く含む黒色土が堆積する。遺物はコンテナ 2 箱分が出土した。**70** は壺の肩部付近で突帯の下に 2 条の横沈線と貝殻で羽状文を施す。**71** は壺の胴部か。外面に線刻を施す。**72** は壺の胴部片。断面 M 字状の突帯を巡らせ、外面は丹塗りである。**73・74** は甕の底部である。**75** は甕で復元口径 24.4㎝を測る。**76** は甕の底部で底径 6.8m を測る。

SK49　B-1 区で検出した。平面プランは長軸 2.3 m、短軸 1.2 mで深さ 60㎝を測る。かなり深い遺構で相当の土量はあったにもかかわらず遺物はごく少量しか出土しなかった。弥生時代。

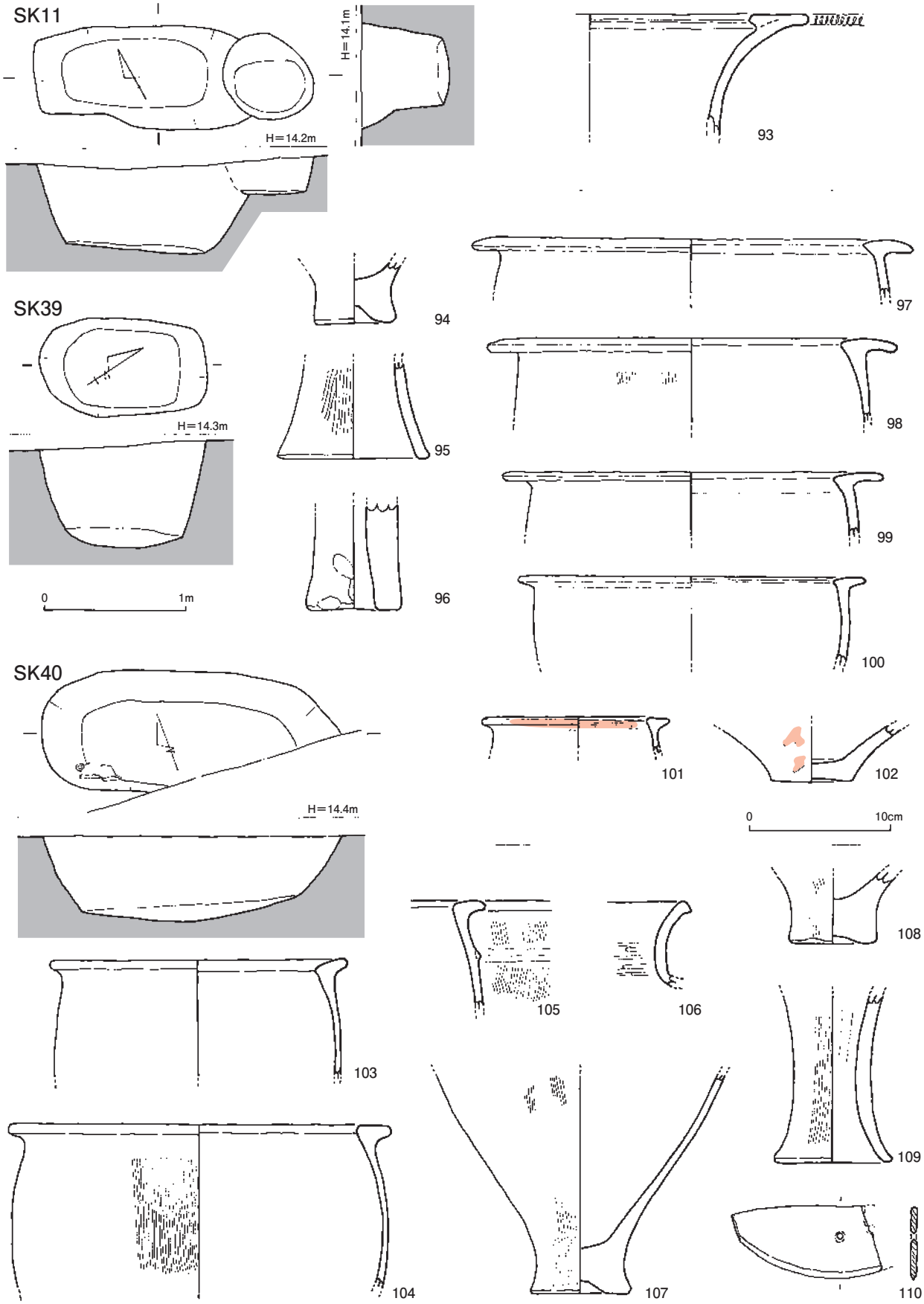
SK54　A-1 区で検出した。長軸 2.8 m、短軸 1.5 mの不整形で深さ 10㎝を測る。遺物はコンテナ 0.5 箱分が出土した。**77 ～ 79** は刻目突帯文土器の甕口縁部である。**80** は甕の底部で底径 6.6㎝を測る。



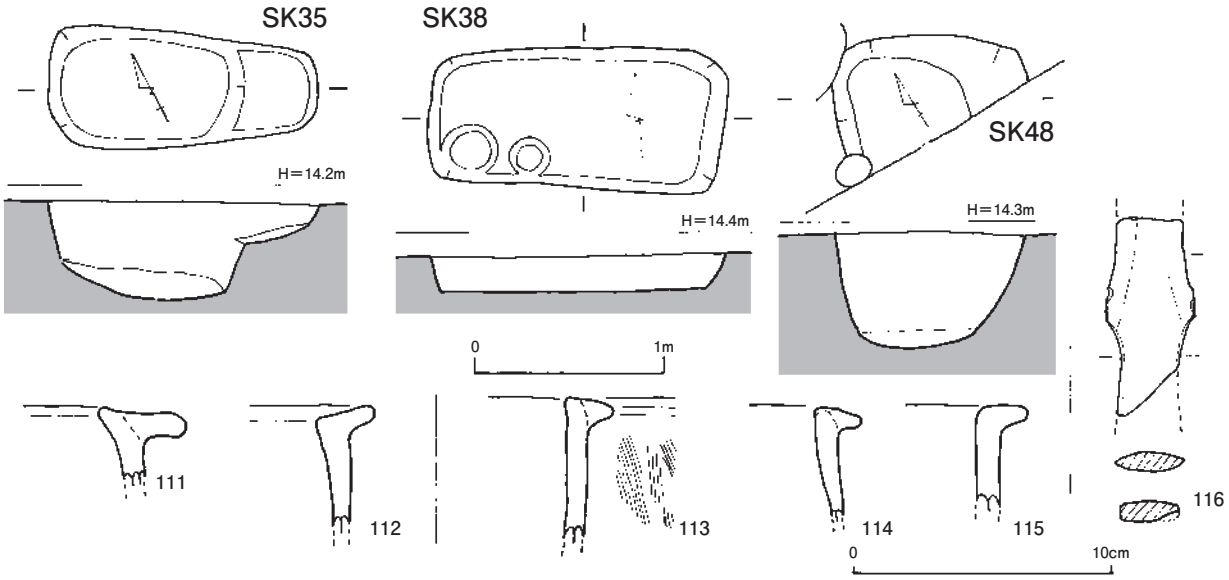
第 13 図　SK09・16・24・49・54（1/60）および出土遺物（1/3、1/4）　　75・76 は 1/4、他は 1/3



第 14 図　SK22・37・51（1/40）および出土遺物（1/4、1/1）　　92 は原寸大、他は 1/4



第 15 図　SK11・39・40（1/40）および出土遺物（1/4）



第 16 図　SK35・38・48（1/40）および出土遺物（1/3）

【その他の土坑】（第 14 ～ 16 図）

SK22　A-3 区で検出した。平面プランは直径 1.4 ～ 1.5 ｍの略円形で、深さ 45㎝を測る。遺物はコンテナ 1 箱分が出土した。**89** は壺である。上半はほぼ完存し口径 8.2㎝、胴部最大径 20.0㎝を測る。胴部上位に 3 条の横沈線と 3 重の円弧を施す。**90**は高坏である。脚部外面は縦方向に磨く。**91** は壺である。復元口径 16.6㎝を測る。内外面ともに横方向のミガキ。**92** はアマゾナイト製の小玉。緑色で比重は 2.522、蛍光 X 線分析の結果、カリウム、ルビジウムが特徴的に検出された。

SK37　A-2 区で検出した。平面プランは長径 1.1 ｍの楕円形で深さ 60㎝を測る。遺物はコンテナ 1/4 箱分が出土した。弥生時代前期。**86** は刻目突帯文の甕の口縁部である。**87** は壺の底部。**88** は甕の底部。

SK51　B-1 区で検出した。短辺が 1.5 ｍの楕円形で調査区外に延びる。深さ 30㎝を測る。遺物はコンテナ 1.5 箱分が出土した。**81** は夜臼式の甕で復元口径 24.4㎝、胴部最大径 26.6㎝。**82** は刻目突帯の甕で復元口径 23.0㎝。内面には粘土紐の継ぎ目が見える。**83** は壺で頸部と胴部の境界が明瞭な稜をなす。胴部上位に 3 条の沈線で文様を施す。**84** は甕の底部で底径 7.6㎝。**85** は鋤先口縁の甕。混入品であろう。

SK11　A-4・5 区で検出した。平面プランは長辺 1.5 ｍ、短辺 0.7 ｍの長方形で深さ 60㎝を測る。遺物はコンテナ 1/4 箱分が出土した。弥生時代中期。**93** は壺の口縁部。

SK39　A-1 区で検出した。平面プランは長辺 1.2 ｍ、短辺 0.7 ｍの隅丸方形で、深さ 75㎝を測る。遺物はコンテナ 1.5 箱分が出土した。弥生時代中期。**94** は甕の底部。**95** は器台。**96** は支脚か。**97** ～ **101** は甕の口縁部で鋤先口縁。小型の 101 は内外両面に丹塗りの痕跡が残る。**102** は壺の底部。

SK40　A-1 区で検出した。平面プランは長辺 2.1 ｍ、短辺 0.9 ｍの隅丸長方形で、深さ 60㎝を測る。遺物はコンテナ 2 箱分が出土した。**103**～**105** は甕の口縁部である。**106** は壺の口縁部。**107**・**108** は甕の底部。**109** は器台。**110** は石包丁。

SK35　A-2 区で検出した。平面プランは長辺 1.4 m、短辺 0.7 mの隅丸長方形で、深さ 50㎝を測る。少量の遺物が出土した。**111・112** は甕の口縁部である。

SK38　A-1 区で検出した。平面プランは長辺 1.6 m、短辺 0.7 mの長方形で、深さ 20㎝を測る。少量の遺物が出土した。**113 ～ 115** は甕の口縁部である。

SK48　A-1 区で検出した。平面プランは一辺が 1.0 mで調査区外に延びる。深さ 55㎝を測る。ごく少量の遺物が出土した。**116** は石剣であろうか。両端が欠けており菱形状に遺存するが、図上側は両側に刃部をつくりだす。図下側は両側を面取りしている。

4．甕棺墓

弥生時代中期の小児用の甕棺墓を 1 基検出した。遺構としては確認できなかったが、これ以外にも成人用甕棺の破片が河川跡内などから少量ながら出土した。

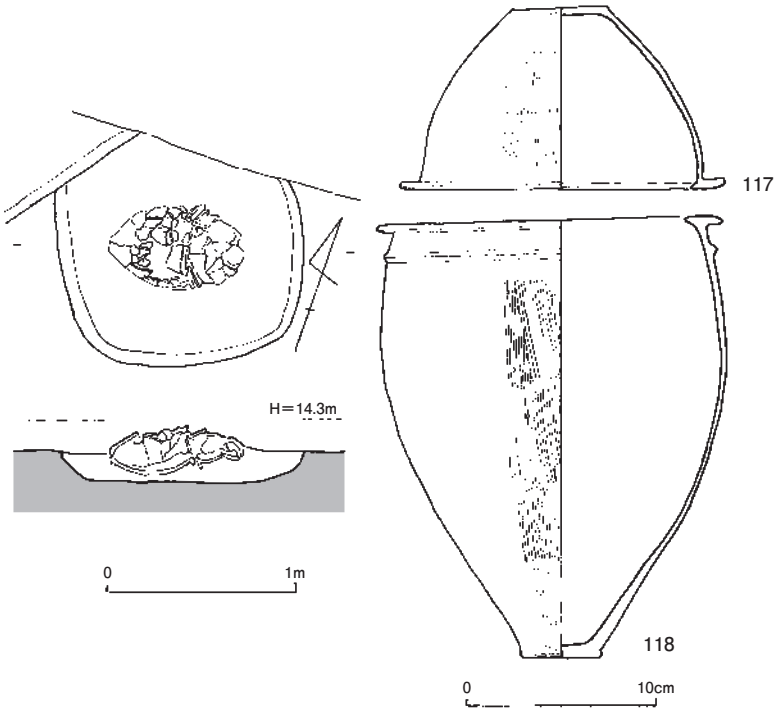
ST29（第 17 図）

A-3 区で検出した小児用甕棺墓である。一辺 1 .3 mの正方形に近い堀方と推測される。埋土は暗褐色粘土で、甕と鉢を合せ口にして埋葬されていた。人骨は残っていない。

117 は鉢である。口径 34.2㎝、器高 19.2 ㎝、底径 10.0 ㎝を測る。

118 は甕である。口径 37.4㎝、器高 46.2㎝、底径 36.6㎝を測る。

鋤先口縁でその直下に 1 条の三角突帯を巡らす。



第 17 図　ST29（1/40）および出土遺物（1/4）

5．河川跡

6 頁の概要でも述べたが、調査地北東側の広い範囲において弥生時代の河川跡を検出した。A 区では流路の底に粘土が厚く堆積し、そこから大量の弥生土器や木材が出土した。平時にもここに河川が流れていたことがわかる。また、粘土層の上と東側には洪水時の河川氾濫によって形成されたであろう砂層が見られる。その中からも多くの弥生土器が出土した。一方、B・C 区では流路底に粘土の堆積層がほとんど形成されず、土器の出土量も著しく少ない。河川本体ではなく河川氾濫時の土砂が堆積しているのだろう。A 区と B 区に分けて記述する。

【A 区の河川跡】

表土剥ぎ直後に調査区東端の A-6・7 区に河川跡があることがわかった。河川跡の深さと層序を確認するために、まずは調査区の南壁沿いに幅 1.2m のトレンチ（第 3 図を参照）を設定して掘り下げた。

かなりの量の弥生土器を含む包含層が厚く堆積しており、深さ 1.5 m以上掘り進めたところで湧水した。土層を確認したところ、滞水時の堆積である黒褐色系粘土層、流水時に形成されたであろうシルト層、細砂層、粗砂層、礫層が複雑に堆積していた（**第 19 図**）。

層序や遺物の時期・出土状況から見て、少なくとも 4 つの堆積時期が異なる流路に細分できそうであったので、それらを NR01 ～ NR04 と名付けた。

福岡市の遺構分類記号において自然流路は SD となっているが、人が掘った溝も大規模な自然流路も同じ SD で表すのに少し違和感をもってきた。文化庁文化財部記念物課発行の『発掘調査のてびき―集落遺跡発掘編―』（2010 年）の 242 頁に自然流路 NR（Natural River）とあるのを見て、今回は NR を用いた。

第 18 図の土層模式図に示すように、深さ 20 ～ 30㎝の浅い流れが 2 本ある。西側（図右側）を流れるのが NR01 で、灰褐色シルト質土（砂粒を多く含む）である。NR01 の底面に沿って弥生土器が面的に散布していた。東端（図左端）を流れるのが NR02 である。灰褐色粘質土で遺物は少量しか含まない。中世の須恵器、土師器片が出土しており、この流れだけは新しい堆積のようである。ちなみに中世の遺構は調査区内では検出されていない。

さらにその下には縄文時代晩期～弥生時代中期の土器を含む堆積が深さ 70 ～ 130㎝ほど堆積している。その底あたりに黒色系の粘土層が 2 か所あり、それらを NR03、NR04 とした。NR03 は第 18 図土層模式図の中央あたりに位置する流れで、巨大な木材が数点横たわっていた。掘り下げの段階で途中を切断してしまったが、長さ 5 m以上の巨木が斜めに横たわり、それに直交する形で杭や未加工の枝が置かれている。水を堰き止める施設であろう。

その西側を流れるのが NR04 である。第 19 図を見ると灰色粘土が厚く 70㎝程度堆積している部分もあり、弥生土器が大量に含まれていた。層序から見て NR03 よりも古い流れである。

NR03・NR04 の下は拳大～人頭大の礫がごろごろ重なった礫層である。一部を深堀りして確認したが、これより下は無遺物層の可能性が高い。また、NR03 より東は上から下まで砂層であり、弥生土器が含まれる。

【A 区河川跡からの出土遺物】

発掘調査では、自然流路内を分層し、流れごとに時期差がないかを確認するために、それぞれに分けて取り上げた。整理作業で確認した結果、NR02 は中世で他よりも明らかに新しい堆積であるが、それ以外は、いずれも刻目突帯文土器から弥生時代中期にかけて土器を含んでおり、時期差を捉えることができなかった。とは言え、小区分した流路ごとに分けて報告する。

NR01 出土遺物（第 20・21 図）

第 20 図 **119 ～123** は夜臼式、刻目突帯文の甕口縁部である。119 は内外面に貝殻条痕を施す。120 は外面に丹が付着する。123 は外面に縦刷毛。**124 ～ 133** は板付Ⅰ式・Ⅱ式、如意形口縁に刻目を施した甕口縁部である。**134** は口唇部に刻目を施すが、器形は壺か。**135・136** の甕口縁部は上面が平坦で、断面逆 L 字形。**137 ～ 140** は須玖式、鋤先口縁の甕口縁部。139 は口縁部直下に 1 条の三角突帯をめぐらす。**141** は口縁端部に三角突帯をめぐらすが刻目はない。夜臼式の時期か。

第 21 図 **142 ～ 153** は甕の底部である。平底のものが多いが上げ底のものもある。**154** は板付Ⅱ式の壺で、口径 13.4㎝、外面に丹塗りを施す。頸部と胴部の境に突帯を巡らす。**155** は鋤先口縁の広口壺で口径 33.0㎝を測る。**156** は壺胴部片で、ヘラ描き沈線の複線弧状八字形文を配する。**157** は壺の

胴部片で複線弧状文を線刻するが、ヘラ描きではなく貝殻を当てて施文したように見える。158 は口縁部が短く折れる壺で、口径 16.0㎝を測る。159 は鋤先口縁の広口壺で、口縁端面に浅い刻目をつける。160 ～ 166 は壺の底部である。167 は蓋である。

NR02 出土遺物（第 22 図）

168 は土師器の小皿である。口径 9.0㎝、器高 1.8㎝を測り、灰褐色を呈する。底部は丸みを帯びる。169 は須恵質の底部で灰色を呈する。

NR03 より東の砂層出土遺物（第 22 図）

ほぼすべて弥生時代の遺物であるが、古代の須恵器が少量だけ出土した。須恵器は上層の NR02 に伴うものかもしれない。170 は須恵器の高台付きの坏の底部で、底径 8.0㎝、灰白色を呈する。171 は須恵器坏蓋のつまみである。ボタン状で青灰色を呈する。

172 ～ 175 は弥生土器の甕口縁部である。172 は口縁部を肥厚させる板付Ⅰ式。176 は弥生土器の甕底部である。177 は弥生土器の甕口縁部である。口縁部に突帯をめぐらせ、間隔をあけてまばらに浅い刻目を施す。胴部上半と下半がわずかにくの字状に折れ、その境にも刻目突帯がある。178・179 は弥生土器の壺口縁部である。内外面に丹塗りを施す。180 は弥生土器の大型壺の底部である。外面に丹塗りの痕跡がある。181 は弥生土器の蓋である。

NR03 出土遺物（第 23 ～ 24 図）

第 23 図 182 は夜臼式の鉢である。胴部上位でくの字に折れる。口径 36.0㎝で内外面とも丁寧に磨く。183 ～ 189 は甕の口縁部である。183 は口縁部が直立して短く外に折れ、口縁端部に刻目を施す。外面に縦方向の磨き。184 ～ 187 は如意形口縁で刻目を施す。184 は口縁直下にも貼付け突帯を 1 条めぐらす。口径 30.8㎝。185 は口縁部を肥厚させ、口縁直下に段を形成する。口径 21.2㎝。186 は上半が残っており外面は縦方向の刷毛目調整。口径 25.0㎝。188 は短く外反する口縁部で刻目はない。189 は鋤先口縁で口径 30.8㎝。190 ～ 194 は甕の底部である。190 は底部中央に径 1.5㎝の穿孔をうがつ。194 は外底に木の葉の葉脈の痕跡が明瞭に残る。

第 24 図 195 ～ 197 は壺の胴部でヘラ描きの線刻がある。195 は 4 条の横沈線の下に 4 重の弧状文を配する。196 も 4 重の弧状文を配する。197 も弧状文を線刻。198 は小型の壺である。球形の胴部と頸部の境は不明瞭で、胴部と頸部の境に 2 条の沈線をめぐらす。外面は磨き調整で、内面に指押圧痕が残る。199・200 は壺の底部である。201 は広口壺で口縁部の内側に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。202 は鉢か。黒色磨研土器で内外面を丁寧に磨いている。口径16.8㎝。203・204 は蓋である。205 は太型蛤刃石斧である。

NR04 出土遺物（第 25 ～ 28 図）

第 25 図 206 は夜臼式の鉢である。胴部上位でくの字に折れる。口径 33.0㎝で内面を丁寧に磨く。207 ～ 210 は夜臼式、刻目突帯文の甕口縁部である。208 は小型品で口径 17.0㎝。胴部のかなり下方に刻目突帯がつく。209 は外面に貝殻条痕がつく。211 ～ 213 は板付Ⅰ式、如意形口縁の甕口縁部である。214 は甕棺の口縁部か。口縁部の内側を粘土紐で厚く肥厚させ、口縁端面に刻目を施す。215・216 は刻目のない甕口縁部。胴部から直立し口縁が外反する。216 は口縁直下に 1 条の沈線をめぐらす。

第 26 図 **217 ～ 219** は板付Ⅱ式の甕口縁部である。胴部が丸みをおび、口径と胴部最大径がほぼ同じになる。口縁部は外に屈折する。**220 ～ 223** は鋤先口縁の甕口縁部で得ある。222・223 は口縁直下に断面三角形の突帯をめぐらす。

第 27 図 **224 ～ 235** は甕の底部である。平底のものが多いが、底部が分厚く上げ底になっているものもある。

第 28 図 **236 ～ 239** は弥生時代後期初頭の袋状口縁壺である。出土量はとても少ない。**240 ～ 244** は壺の底部である。243 は外面を磨き調整し、丹塗りの痕跡がある。**245・246** は小型の壺である。**247** は蓋である。**248** は黒色磨研土器で波状口縁の浅鉢。夜臼式か。内外面を磨き、黒褐色を呈する。縄文時代後期の黒色磨研土器はわずかしか出土していない。**249** は石包丁。**250** は管玉。

【B 区の河川跡】

B 区の大部分は河川跡の範囲に入り、弥生時代の遺構面は残っていない。ただ、A 区とはちがって深い流路やその底に堆積した黒褐色粘土層はほとんどなく、全体が比較的浅い堆積である。堆積層のほとんどは砂かシルトである。流路跡の底には拳大の礫がごろごろ入った礫層が堆積しており、この層は無遺物層である。一部でこの礫層を掘り抜いてさらに下の堆積を確認したが、砂層を間に挟んで、拳大の礫がごろごろ入った礫層がまた堆積していた。

この礫層は巨視的に見ればほぼ水平に堆積しているが、部分的に高く盛り上がっている場所がある。一番顕著なのが B-2 区あたり（第 5 図および第 6 図土層上段の右半）の礫群 1 で高さ 80㎝程度、裾で幅 9m、上部で幅 5m ほどになる。その表面は人頭大から拳大の白い石・礫が密に散布しており、あたかもこの部分だけに人が石を積んだかのように見える。初めてこの巨大な石積みを見た私は弥生時代以前の時期にこのような不可思議な人工物が存在するのかと混乱したが、同僚に見てもらったところ、これは自然の生成物である。本調査地は扇状地に位置するが、山あいの狭い谷間で発生した激しい勢いの河流が勾配の緩く幅の広い平地に出ることで、河流は周囲に氾濫して浅くなるので、河底の摩擦抵抗を多く受けて、流速が遅くなり運搬力も衰えて、出水時に運搬してきた粗粒の砂礫を流路沿いに堆積する。このような仕組みで形成された自然流路沿いの砂礫の高まりであり、市内の発掘調査でもしばしば確認されるそうである。

礫群 1 の東側 10 m の位置にも幅 3m、高さ約 60㎝の礫群 2 と名付けた高まりがある。幅 4 m のトレンチ内だけしか確認していないが、おそらく北西から南東に向けて斜め方向に帯状に延びているのだろう。

土器の出土量は、A 区で非常に多く出土したのとは対照的で、まばらにしか出土しなかった。礫群 2 の東側で大きめの弥生土器破片がまとまって出土したくらいで、他には分布の集中がみられない。A 区では縄文時代晩期から弥生時代前期初頭の突帯文土器が多く出土するのに対して、B 区では弥生時代中期の土器が多く、丹塗り土器の割合も A 区よりも高い印象を受ける。

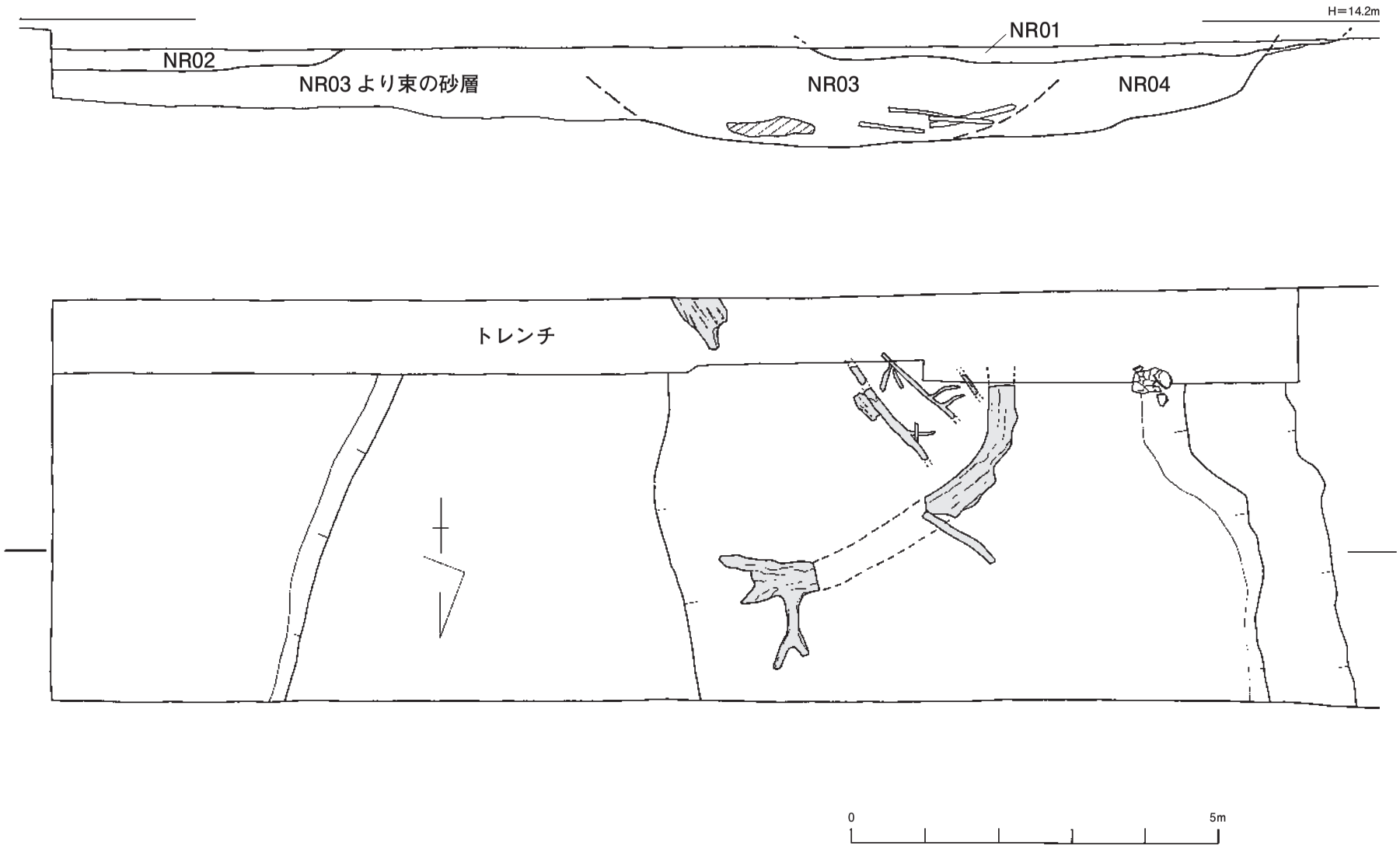
B 区出土遺物（第 29 ～ 31 図）

第 29 図 **251 ～ 254** は弥生時代前期の如意形口縁の甕である。252・254 は口縁の下に 2 条の沈線を巡らす。**255** は逆 L 字形口縁の甕。**256** は鋤先口縁の甕である。**257** の甕は胴部上半がすぼまり、口縁部がくの字形に屈曲する。口縁部付近の内外両面に丹塗りを施す。**258・259** は甕の底部。

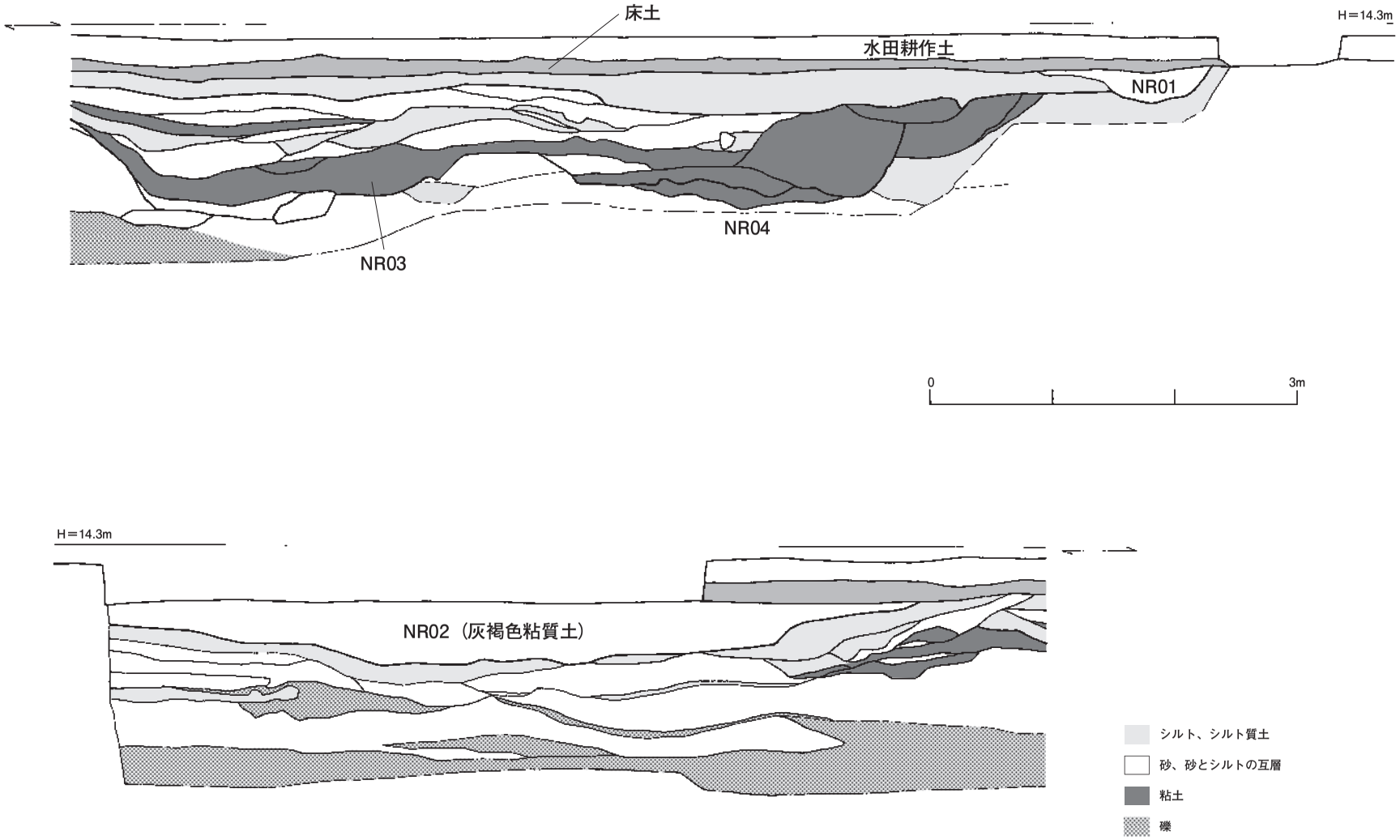
第 30 図 **260・261** は弥生時代中期の鋤先口縁の広口壺である。260 は口縁端部に丹が付着する。261 は外面を縦方向に磨く。**262** は広口壺の胴部から底部である。外面を横方向の磨き、底部付近は

写真 1　NR04 上層土器出土状況（南から）

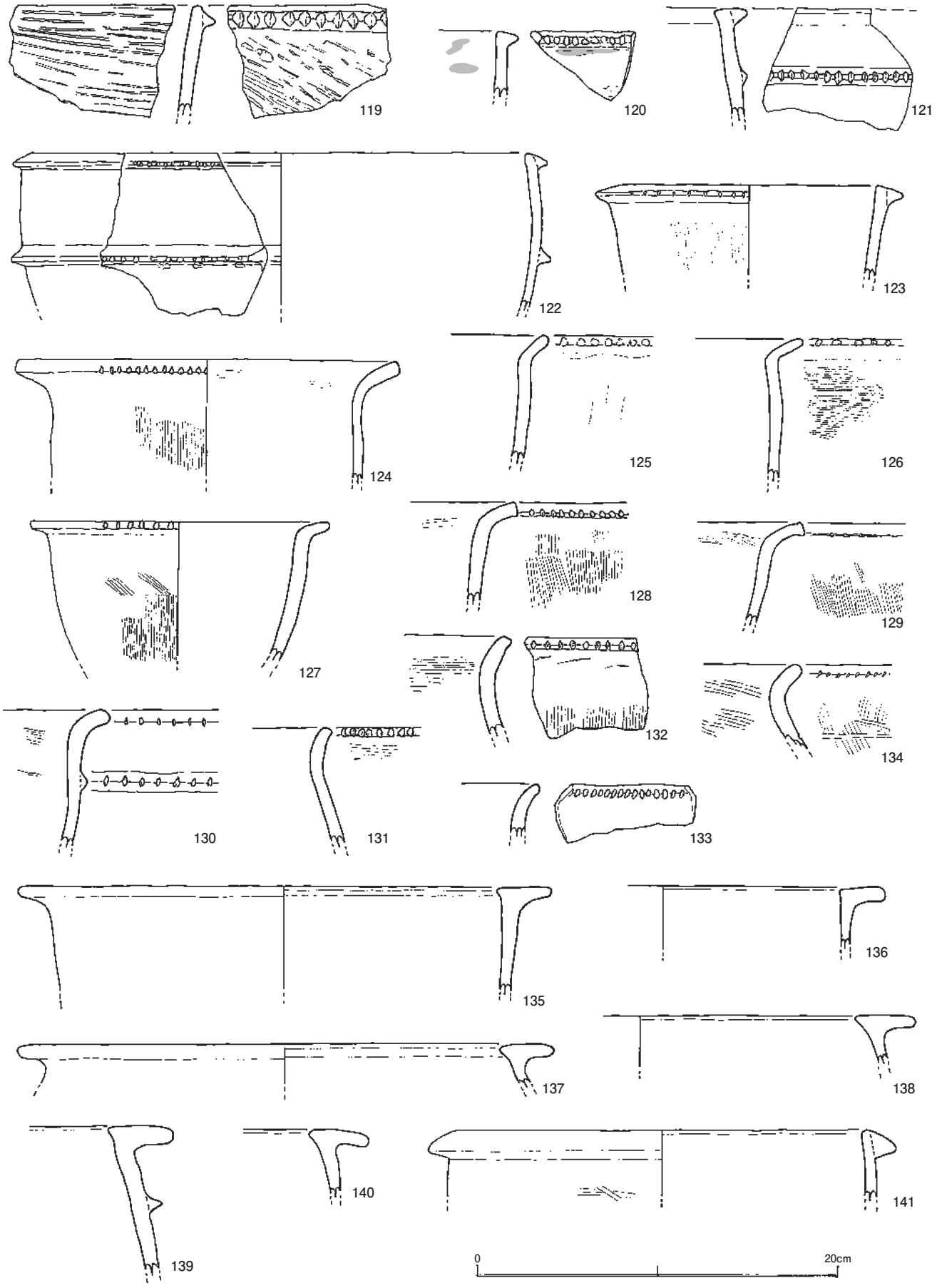
写真 2　NR03 底（南東から）



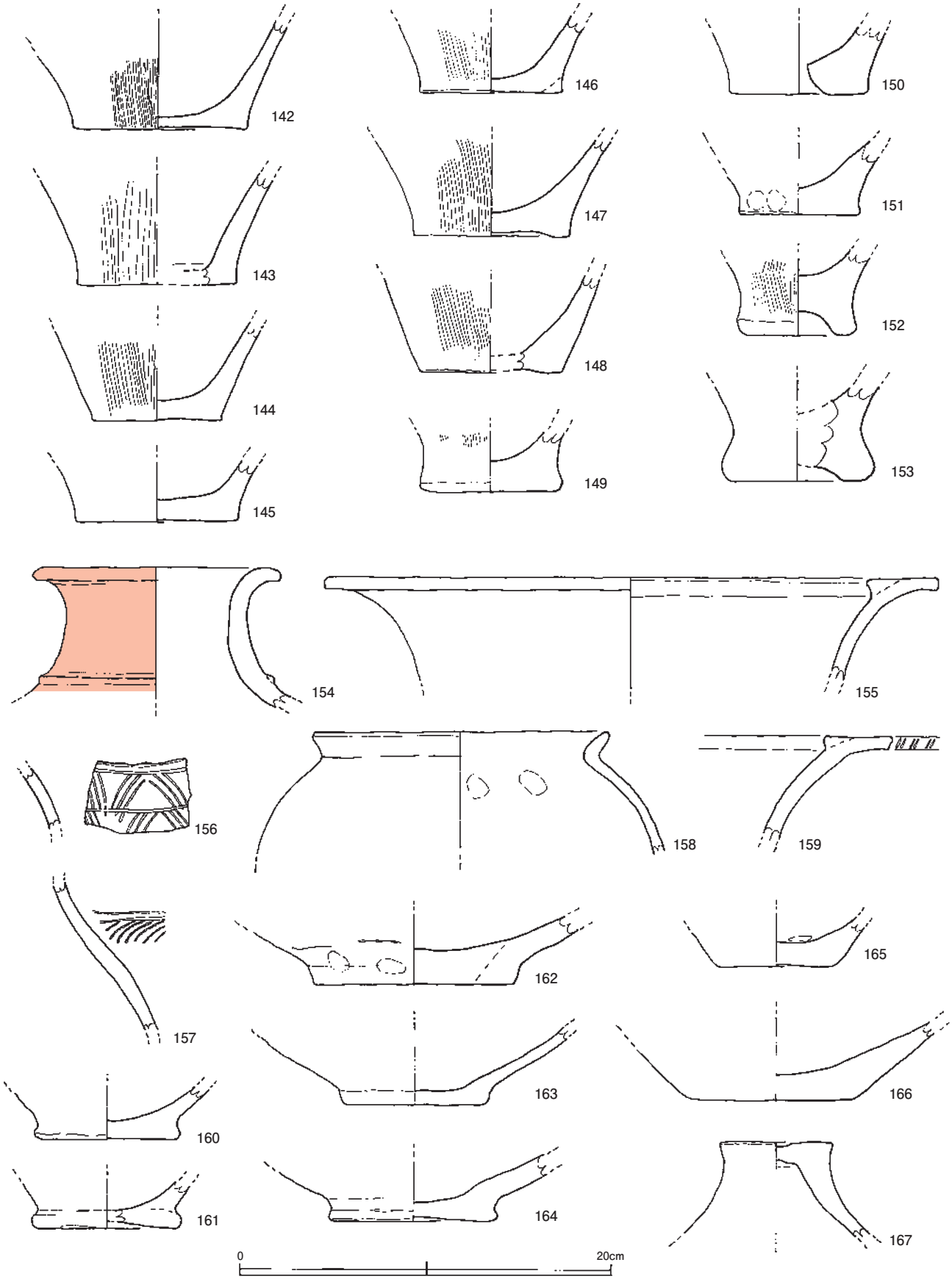
第 18 図　河川跡平面図および断面模式図（1/80）



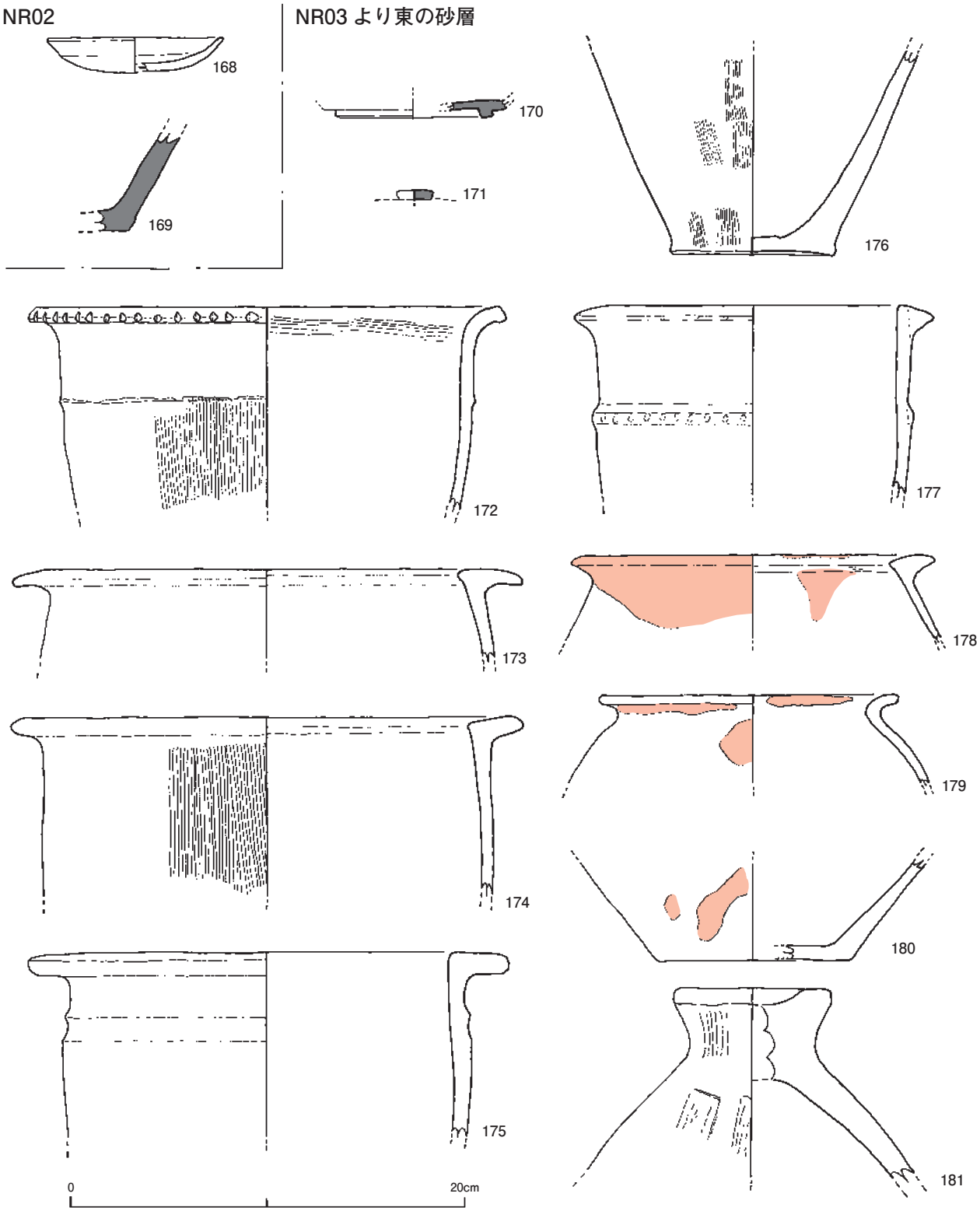
第 19 図　河川跡南壁土層図（1/50）



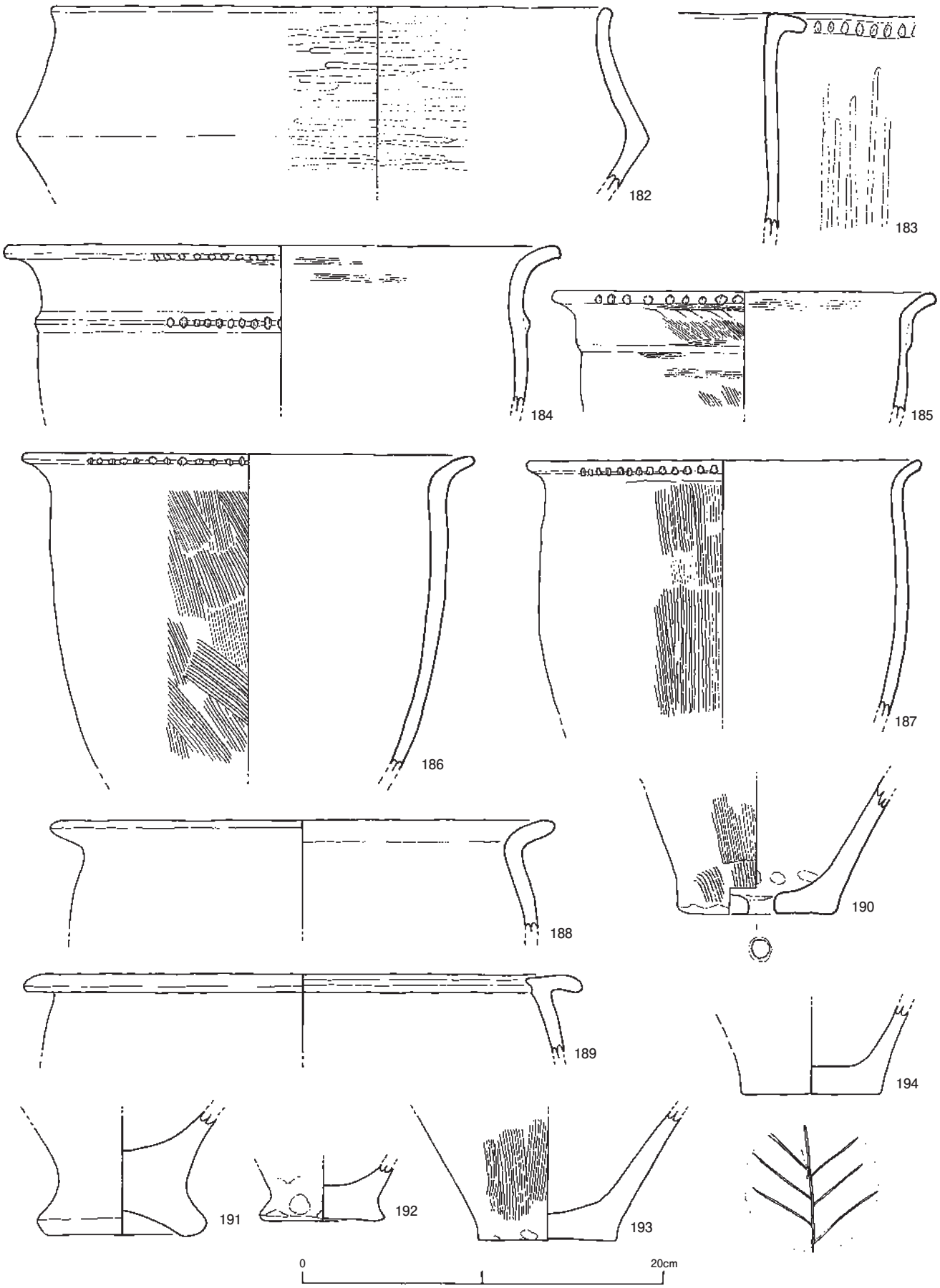
第 20 図　NR01 出土遺物 1 （1/3）



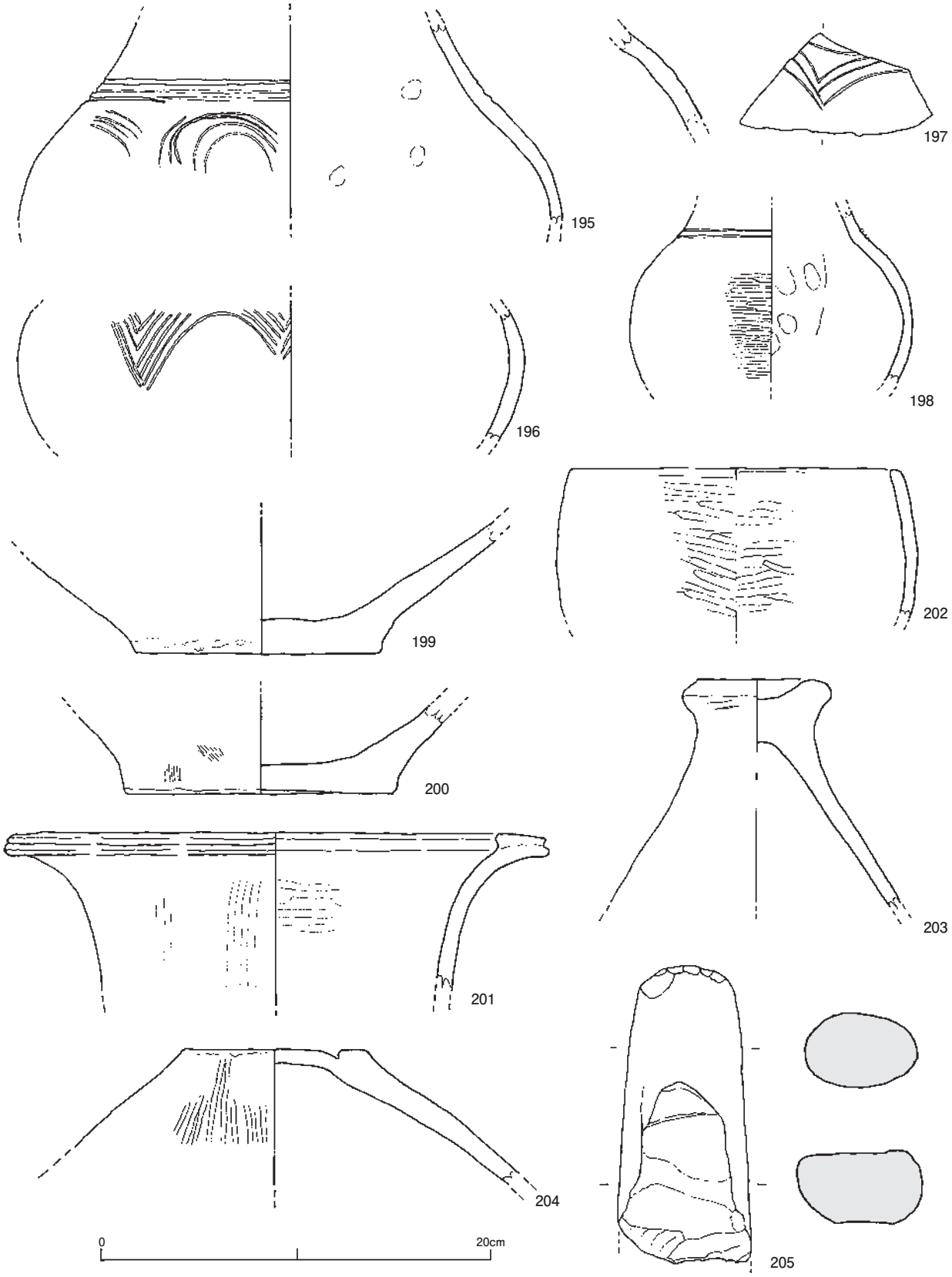
第 21 図　NR01 出土遺物 2（1/3）



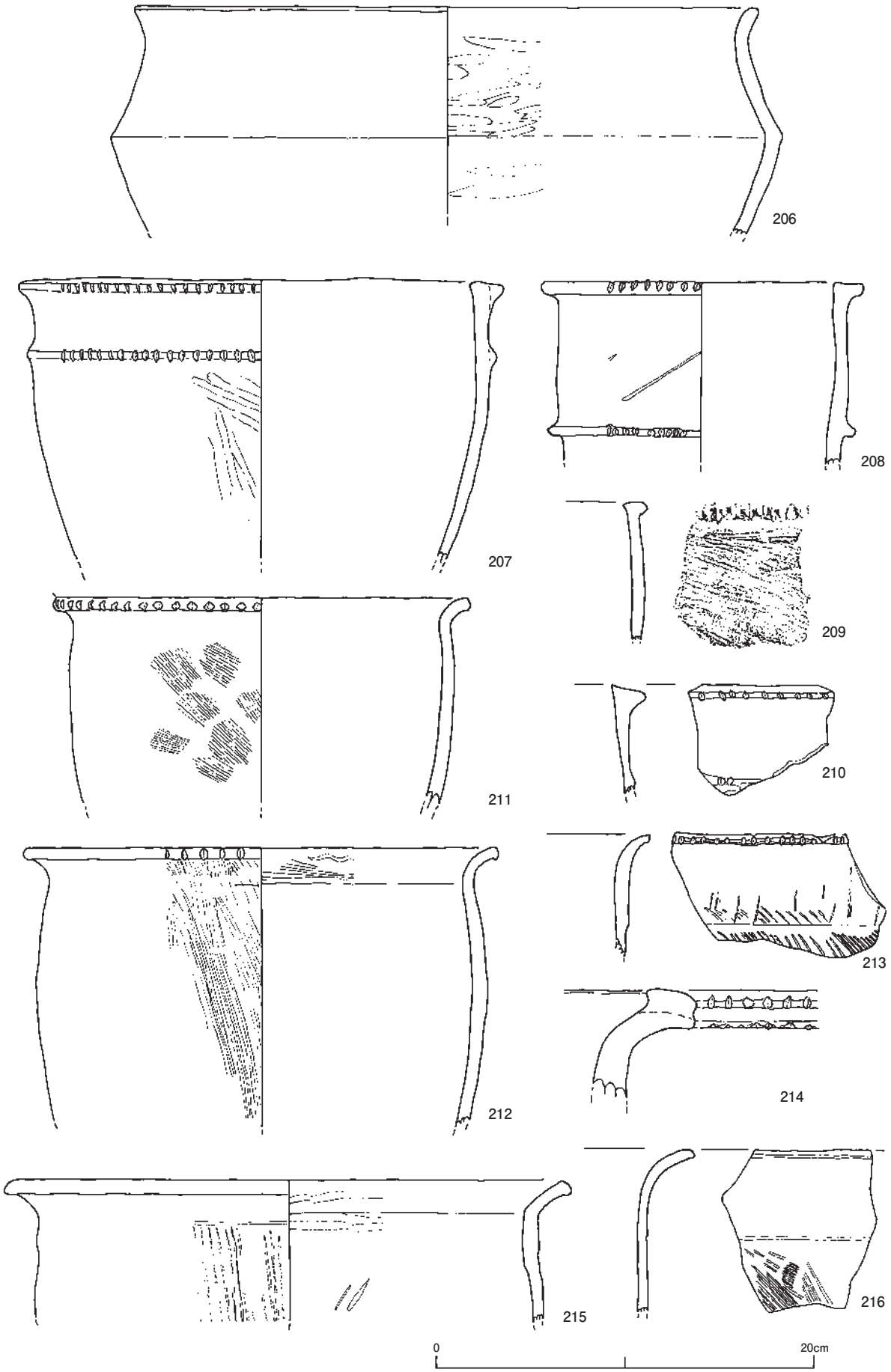
第 22 図　NR02、NR03 より東の砂層出土遺物（1/3）



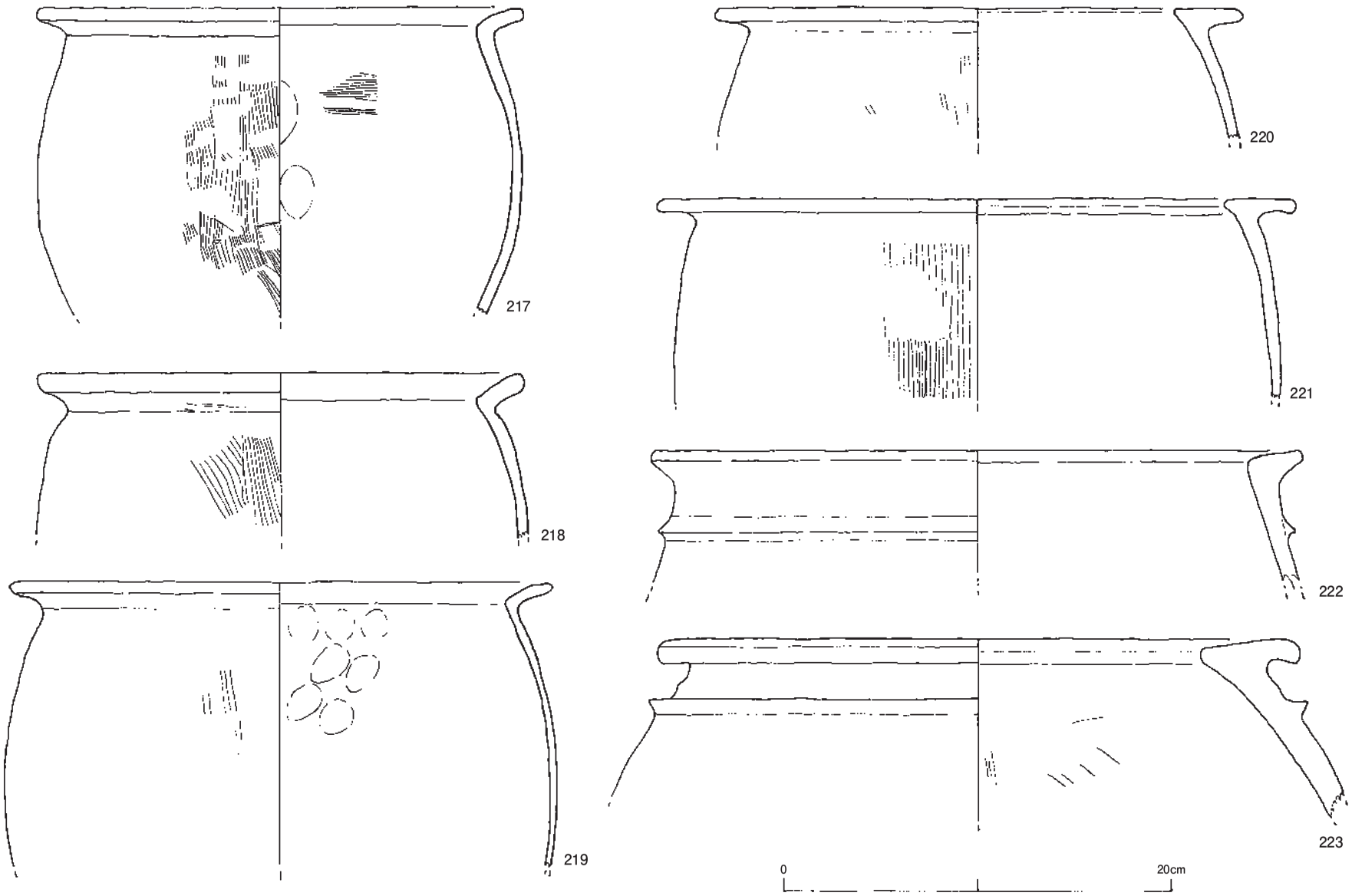
第 23 図　NR03 出土遺物 1 （1/3）



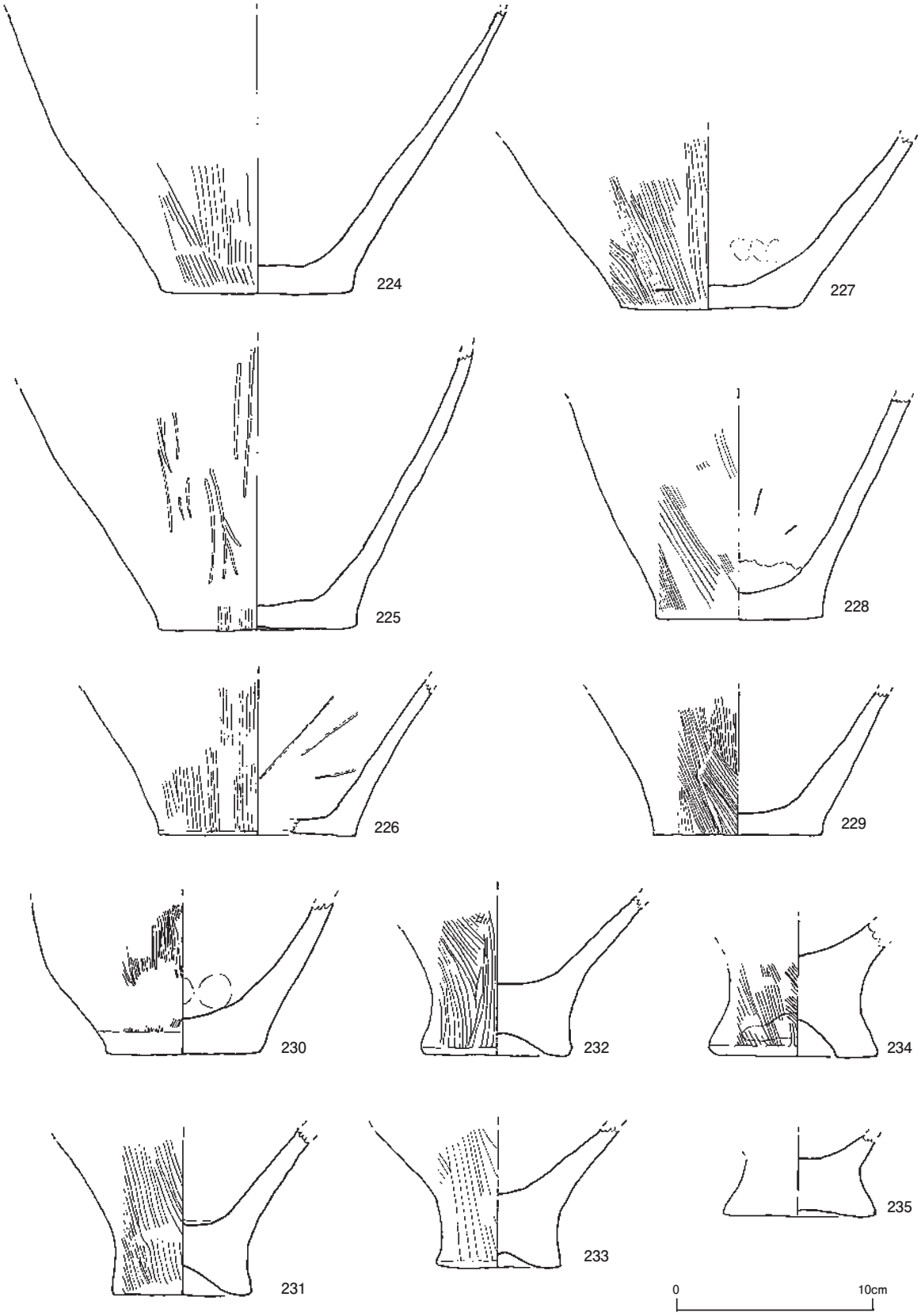
第 24 図　NR03 出土遺物 2（1/3）



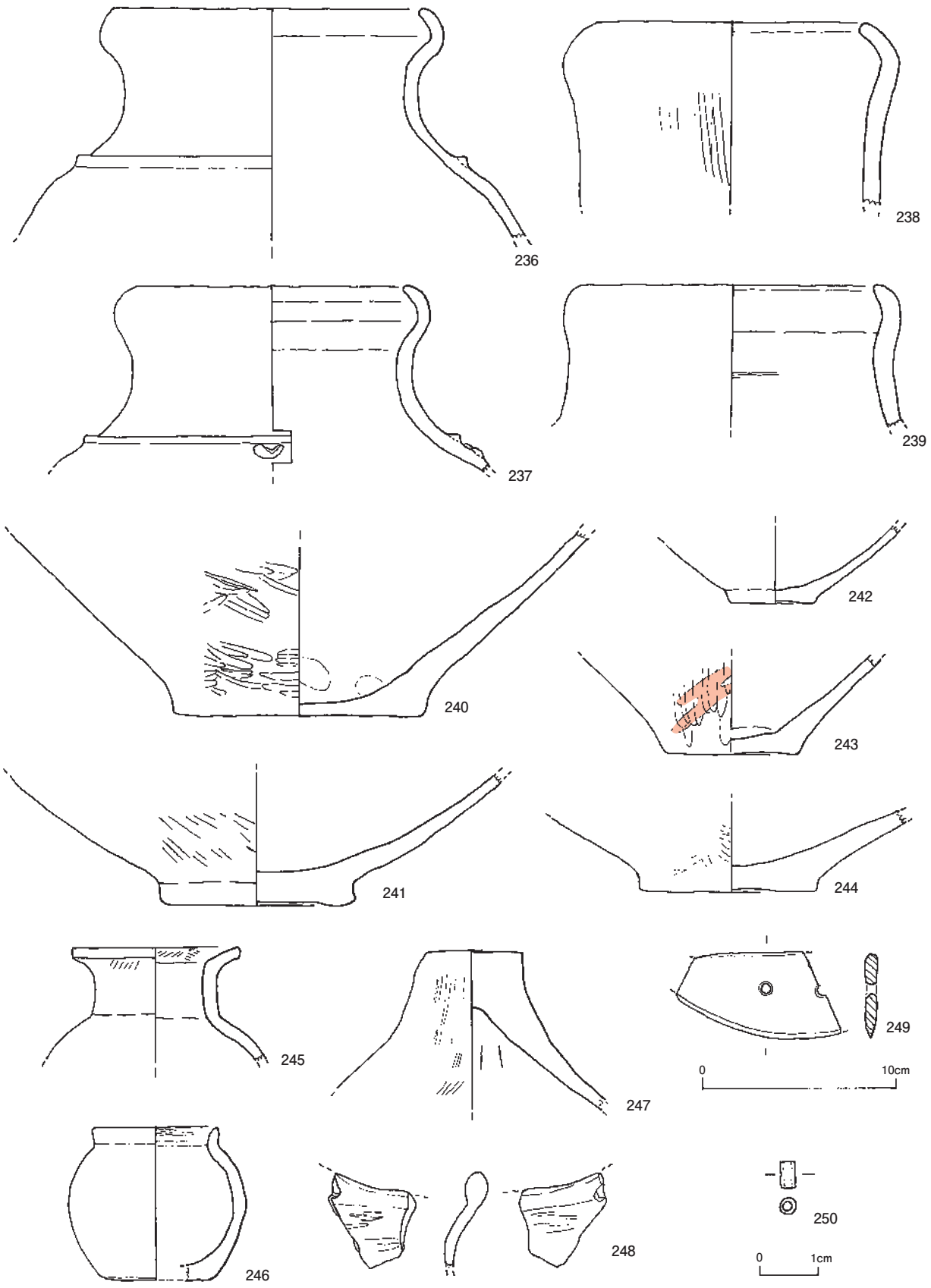
第 25 図　NR04 出土遺物 1 （1/3）



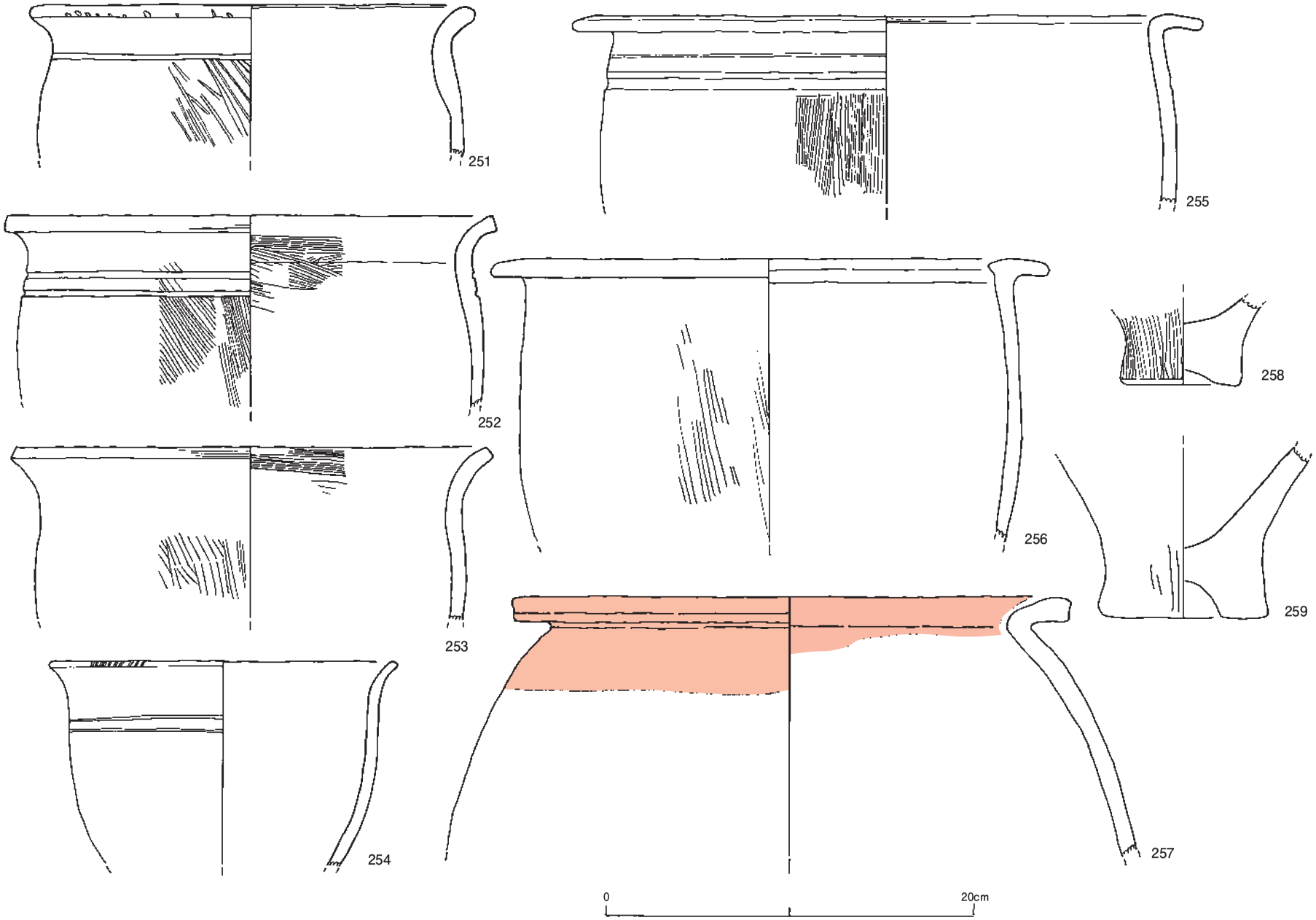
第 26 図　NR04 出土遺物 2（1/3）



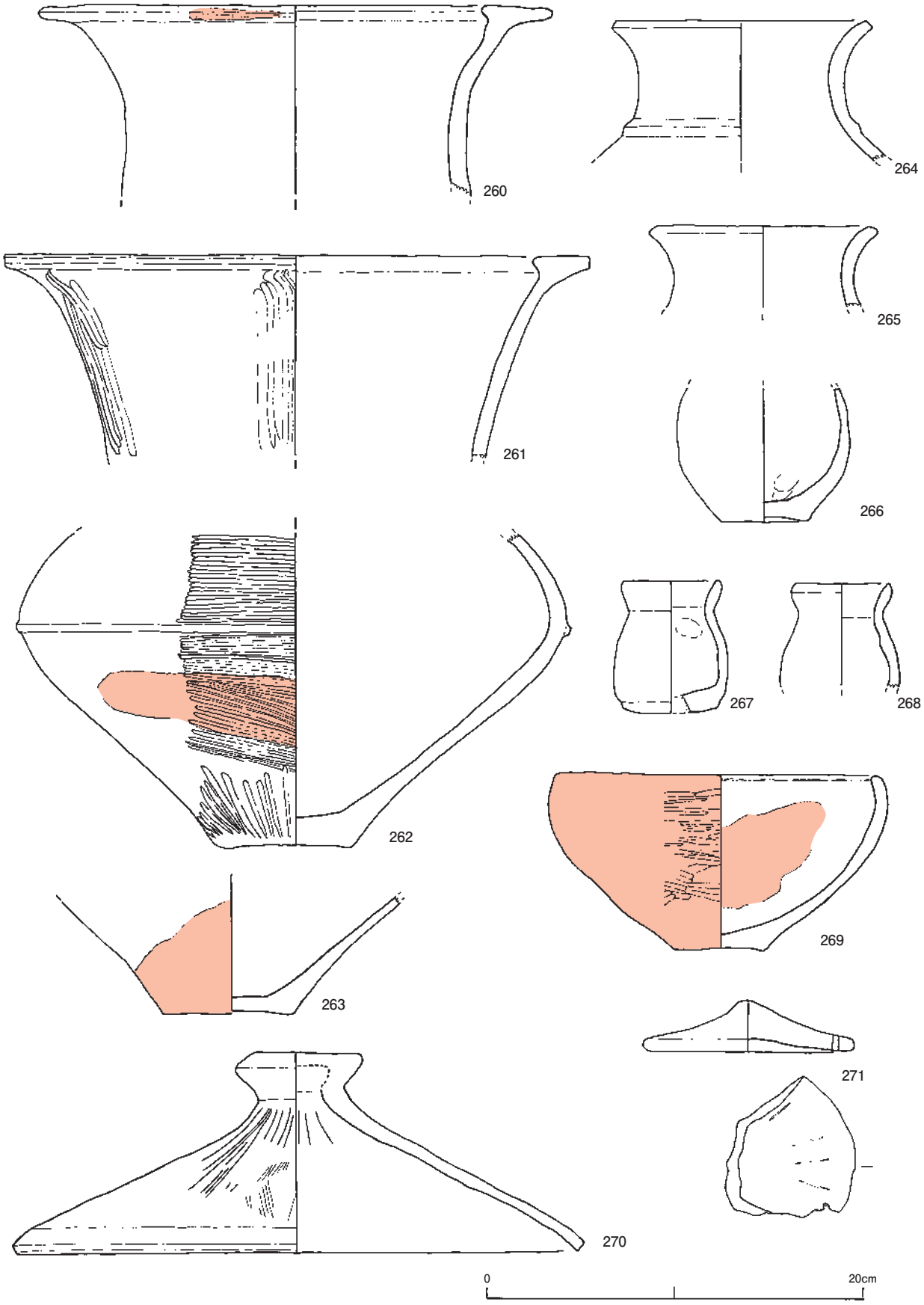
第 27 図　NR04 出土遺物 3 （1/3）



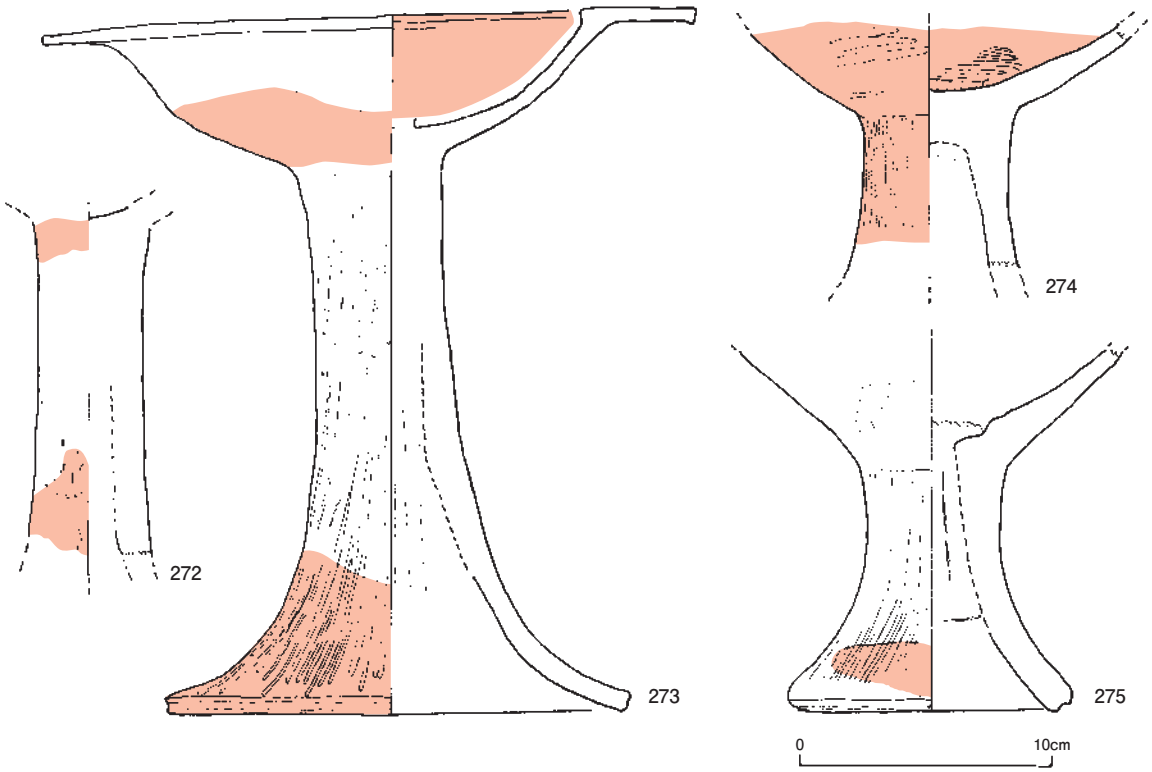
第 28 図　NR04 出土遺物 4（1/3、1/1）　　250 は原寸大、他は 1/3



第 29 図　B 区出土遺物 1（1/3）



第 30 図　B 区出土遺物 2（1/3）



第 31 図　B 区出土遺物 3（1/3）

縦方向の磨きで器面調整し、外面に一部丹が付着する。263 も広口壺の底部である。外面に丹塗り。264・265 は口頸部が外反する壺である。266 ～268 は小型の壺である。269 は鉢である。外面は横方向に磨く。内外面とも丹塗り。270・271 は蓋である。271 は穿孔がある。

第 31 図 272 ～ 275 は高坏である。いずれも丹塗りを施す。273 は口径 25.6cm、器高 28.0cm、底径 17.8cmを測る。

第４章　まとめ

今回の田村遺跡第28次調査では、①夜臼式土器と板付Ⅰ式土器が共伴する縄文時代晩期終末～弥生時代前期初頭の時期の円形住居跡６軒、土坑、ピット群、②弥生時代中期、須玖式段階の方形竪穴住居跡３軒、土坑、ピット群を検出した。遺構密度はかなり濃い。紙面の都合と筆者の知識不足から石器についてはほとんど取り上げなかったが、黒曜石の製品・石核・剥片が多く出土した。この集落内で石器生産を行っていたと推測される。

また、調査地の北東側を斜めに横切る河川跡（自然流路）を検出した。Ａ区では堆積が厚く底に黒褐色粘土が堆積している。その上層および東側には洪水時の激しい河流で形成された砂層が堆積している。粘土層と洪水に伴う砂層の両方から、刻目突帯文土器期から弥生時代中期にかけての土器が大量に出土した。Ｂ・Ｃ区で検出した自然流路跡は河川本体ではなく、洪水のときに周囲に河川が氾濫し、その土砂が堆積したものである。

田村遺跡では中世前半の集落跡も広く確認されているが、本地点では遺構･遺物ともに皆無である。古代の須恵器がごく少量、自然流路跡NR02から出土する以外は弥生時代の遺構しかない。

以上のことから､本地点には縄文時代晩期終末～弥生時代前期初頭頃､弥生時代中期の２時期をピークとする相当に大きな集落が営まれていた。ところが弥生時代中期に大規模な河川氾濫が起こり、本地点の北東側にもあったであろう住居などは地盤ごとえぐり取られ壊滅してしまう。それに続く弥生時代後期の遺構や遺物がまったく出土しないことから、ここに住んでいた人々は他の土地に移住したものと推測される。それ以降、長い間本地点に集落が作られることはなく、昭和時代まで水田として利用されていたようである。

田村遺跡全体について見ても、弥生時代前期～中期の集落跡は第３次・17次・20次調査で確認されているが、弥生時代後期の集落は現在までのところ確認されていない。ただ、田村遺跡の北西隅において実施された第26次調査において弥生時代後期から終末にかけての土器がまとまって出土している。26次調査地点の周辺ではまだ調査事例が少ないが､こちら側へ集落が移っている可能性もある。

図版

1－1　調査区から南東方向をのぞむ

1－2　A区全景（西北西から）

2−1　B区全景（西から）

2−2　C区全景（南から）

3－1　A区河川跡（西から）

3－2　NR01完掘状況（北から）

3－3　河川跡トレンチ掘り下げ作業（東から）

4－1　NR03・04底（北西から）

4－2　NR04完掘状況（北から）

4－3　B区礫群1作業風景（東から）

4－4　B区礫群1～礫群2（西から）

5－1　SC07（南西から）

5－2　SC25（北東から）

5－3　SC27（北東から）

5－4　SC30（西から）

5－5　SK12（東から）

5－6　SK13（南から）

5－7　SK28（西から）

5－8　ST29（北から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	たむら
書　　名	田村２０
副　書　名	第２８次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1441集
編著者名	上角　智希
編集機関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2022年3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
博多遺跡群 第238次調査	福岡市早良区田村 ２丁目 706番1、708番7	40137	0317	33°32′36″	130°19′52″	20181112 ～ 20190315	843	記録保存調査

	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
	集落跡	縄文時代晩期 ～弥生時代中期	竪穴住居跡、土坑、 自然流路跡	弥生土器、石器	

要　約	縄文時代晩期末～弥生時代中期にかけての竪穴住居跡、土坑、ピットなどを検出した。また、同時期の遺物を大量に含む河川跡を検出した。本遺跡では中世前半の集落が検出される地点も多いが、本調査地では弥生時代以外の遺構はない。

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1441集

田村２０

―第28次調査の報告―

2022年（令和４年）３月24日

発　行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神１－８－１

印　刷　新　交　社
　　福岡市中央区地行１丁目11－3